
普通冒険記

龍々

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通冒険記

【Nコード】

N5569X

【作者名】

龍々

【あらすじ】

どこにでもあるような普通の冒険を繰り広げる物語。

魔物、能力者（戦士）冒険、亜人など何処にでもあるような（二回目）物語です

何処にでもあるような（三回目）ファンタジーな世界を繰り広げていくつもりです。

テーマは『何処にでもあるような物語』です。

何処にもいる腐った金持ち（前書き）

何処にもあるような物語、普通冒険記の開幕です。
どうぞ御覧あれ。

何処にでもいる腐った金持ち

世界の何処にでもある様な平和な町、そのカフェで一人の男が珈琲を飲んでいる。

銀色の髪、虎柄のネクタイに薄いサングラス。

そして黒いジャケットを着ていて、腰には黒い長刀、テーブルの上に置いてある荷物の量からして今日、この町にたどり着いた旅人だろう。

ズズズ、と音を立ててストローから珈琲を吸う。

その後コップの中の氷を口の中に流し込んだ後、頭痛に悶える。

格好はワイルドに決めているものの、お頭の方はあまり宜しくない様だ。

「さて……本当に“あれ”がこの町にあるのかね？脳が蕩けそうな程頭の悪そうな町なんだが」

確かに青年の言うとおり町の看板や飾りはあたり一面ピンク一色だ。これでは住民の趣味が疑われても仕方が無い。

因みに青年の言う“あれ”とは世界に四つ散らばっているという神器の事だ。

神器に願い事をすれば何でも叶うと言う神秘の宝である。

青年は町の人ごみの中に姿を消した。

「黄金に光る四角い箱……可能性としては高いか？いや、期待して違ったら……」

青年は新聞を手につつと独り言を言いながら道を歩いている。すると当然、人にぶつかる事になり、そのぶつかった相手がこの町に似合わないゴロツキだったのが運のつきだ。

「んだテメエ！ぶつかっというて謝罪も無しかよ！骨折れたぞ、どうしてくれんだ？」

「うるせえな……」

訂正、運が悪かったのはゴロツキの方だ。

青年はゴロツキの首元に抜き身の長刀を当てる。刃の当たった頬から一筋の鮮血が伝い、ゴロツキは顔を真つ青にする。

「悪い、血い出たか？とにかく俺は急いでんだ、じゃあな」
そういつて青年はその場から立ち去った。

ピンク色の町の中に一軒、黄金に光る、一際趣味の悪い建物、この町有数の富豪の宮殿が町の真ん中に聳えている。

青年はドアの横に設置してあるインターホンを鳴らす。

「すいませんね、少し用事が……」

『ワシは忙しい、帰れ』

インターホンの向こう側から小さく女性の声が聞こえたのは気のせいだろうか。

「……変態爺が」

【バキィッ】

青年は無理矢理ドアを決じ開け中に潜入する。

当然、そうすると無駄に金をかけたセキュリティが反応をし、ロボットが攻撃してくる。

しかしそれは青年には掠りもせず、長刀の一振りですべて破壊される。

【ドンッ】

青年は一番奥にあるドアを蹴り破り、中にいた建物の主人とその横にいた女性を纏めて一蹴する。

「どーもお、不当に金を手に入れた罪でしょっぴきに来ましたあ」

青年の言う不当に金を手に入れた罪、と言うのは神器の力で手に入れたのでは無いか、と疑った物だった。

そして主人の反応からするにそれはビンゴのようだ。

「な、な、なんの事じゃ？い、今すぐ出て行け！じよ、上級戦士を呼ぶぞ！」

この世界には様々な能力を持つ戦士が存在しており、初級、中級、

上級の階級によってランク付けされる。

「おっさん、噛み過ぎだろ？それに上級戦士なら目の前にいるぞ？」

「は？」

「上級戦士、レイジ・ライトウネイルだ。テメエを逮捕しに来た」

「はひいいい！？」

富豪の枕元には噂の黄金の箱が置いてあった。

尤も、僅かな魔力を宿したレプリカの可能性も高い。

レイジが鑑定してみると――

「偽者かよ……」

レイジは元・富豪を政府に引き渡した後、旅を続けた。

何処にでもいる腐った金持ち（後書き）

この小説は「普通のファンタジー」をコンセプトにやっています。
毎日は更新出来ませんがよろしくお願いします。

何処にでもいる狼型モンスター（前書き）

レイジと少女と狼と… 見たいな話です。
内容はどつあれそう言う感じですよ。

何処にでもいる狼型モンスター

とある荒野のど真ん中、レイジは荷物を背負いながらある場所へ向かっている。

この先にあるのは大昔に神官が祈りを捧げたと言われる遺跡。

神官、祈り、と言う言葉から連想されるのは神という言葉。

神器は神が作り出したと言う噂もある事からレイジはそこへ向かう事にした。

「あー、暑い、服がビシヤビシヤじゃねえか」

ジャケットをパタパタと動かし、空気を入れる。

汗が冷える感じがして暑さが少しマシになった。

遺跡の前にたどり着くとレイジは水筒を取り出し、水を口に含む。

「ぶはあつ……さて、この中に神器があるといいんだが」

レイジは階段を降り遺跡の中へ入っていった。

遺跡の中は割と明るく、そして地下なだけに適度に涼しかった。

明るいのには恐らく壁に付いた苔が光っている為だろう。

レイジが遺跡の中を進んでいると、廊下の向こうから物音が聞こえてきた。

大方小動物か魔物が遺跡の中に入り込んだのだろうと予想し、あまり気に留めずに奥へ進んでいく。

遺跡の中には広間があり、そこには奥に続く扉があった。

が、扉の前で力の強そうな魔物が睡眠を貪っており、起こすと戦闘になるかもしれない。

「さて、どうしたもんかね、無駄な争いは避けたいもんだが？」

魔物の姿は狼に似ている。

種類は黒狼獣くろろうじゅうという人語を話す事が出来る化け狐ならぬ化け狼だ。

長く生きたもので百歳以上の物がいると言つらしいがどうやら目の前の黒狼獣は正にそれらしい。

大きさが普通のそれより大幅に上回っているのだ。

もしかするとこの個体は二百歳を越しているかもしれない。

「しょうがねえ……腹を括るか」

黒狼獣の前にレイジが近寄ると黒狼獣はゆっくりと目を開ける。

「なんだよ……折角気持ちよく寝てたのに……人間が何のよう？」

この個体は思ったより子供っぽく、性格も穏やかなようだ。

これなら話し合いの余地は十分にある。

「あー、俺はレイジつつう旅のもんだ。この先のある宝が欲しいんだが貰ってもいいか？」

起きたばかりの黒狼獣は大きく欠伸をした後、レイジにこう答える。

「うーん、ご主人様からアレを渡す相手は慎重に選べって言われているんだけど……」

黒狼獣はそういうと四つの足でゆっくりと立ち上がる。

「まあいいや、あげる」

そういつて黒狼獣は扉の前から体を避ける。

レイジが扉を開けると中には丸い、赤色の玉が置いてあった。

「おっ！これはまさか……」

【ドオオン！！】

突然銃声がしたのでレイジが振り向くと黒狼獣が腹から血を流し倒れていた。

そしてその向こうには拳銃を持った肌の黒い少女がいる。

「それ、頂戴」

少女の言うそれ、とはレイジの手元にある神器らしき赤い玉の事だろう。

レイジはまずは落ち着いて煙草を一服すると煙をゆっくりと吐き出す。

「はいどうぞ……って渡すわけねえだろ？このクソガキ」

【ドオオン！！】

少女がレイジに向かって発砲するとレイジは長刀でそれを弾く。

そして鞘を外し少女に向かって構えると煙草を口から外しこういつ

た。

「ガキといつても容赦はしねえからな？お仕置きだ！」

瞬間、レイジの長刀が光ったかと思うと、刃に電流が走っている。

「せいやー!!」

レイジがそれを一振りすると刃から雷の斬撃が少女に向かって飛ぶ。それがフラッシュを起こし、眼晦ましとなる。

その後少女の銃に長刀が触れると銃に電流が伝い、少女も感電する。

「ビリビリ……いいかも」

「い!?マゾかよ……」

少女の発言にレイジは若干引きながらも次の攻撃に移る。

が、少女の拳銃の弾がそれを許さなかった。

【ドオオン!ドオオン!】

二発、レイジの右手と左胸に弾を放つ。

「む・だ・だ・よ」

馬鹿にするようにそう言いながら長刀で掃う。

「く、本気、出す」

少女は両手に拳銃を持ち、両肩にライフルを背負う。

拳銃とライフルは繋がっているようで、拳銃を撃つとマシンガンも発射される、というふうに仕組まれている。

さて、どうしたもんかね？あーしてこうして、えーと……

頭の中で作戦を練りながら煙草を吸うレイジ。

その手あるのは先ほど握っていた長刀と、少女に撃たれた黒狼獣。魔物は人間より生命力が高く、先ほど撃たれたばかりだということにもう傷が塞がっている。

「僕も……戦闘に加わるよ」

「ちっちええ子供に二人で攻撃すんのか？」

「場合が場合だから仕方が無いでしょ!?……行くよ!」

黒狼獣は少女に向かって飛び掛っていった。

何処にでもいる狼型モンスター（後書き）

何処にでもありがちな冒険。

やっぱファンタジーは良い！と中二全開な作者でした。

何処にでもいる犬耳少年（前書き）

今回ちと話が短めです。

何処にでもいる犬耳少年

神器らしき宝を狙う少女と戦っているのはレイジと先ほどの黒狼獣
——と、思われる着物の少年。

黒狼獣は人語を喋ると言うが、百年以上生きると人間に変化出来る
と言う。

しかもこの黒狼獣は二百年以上生きているのに外見が少年という事
実、どうやら人化した姿には精神年齢が関係する様だ。
因みに、変化した黒狼獣の頭には犬耳がついている。

「ていや!!」

黒狼獣は鋭い爪で少女に攻撃するが、顔を狙わないのは褒めてやり
たい所だ。

「雷刃らいじん!!」

レイジは先ほど使った雷の斬撃を数回放ち、少女の動きを制限する。
しかし少女の拳銃から放たれた弾がそれを打ち消し、さらに赤い玉
の入ったレイジの右ポケットを掠める。

ポケットの布が焦げ、解れた場所から赤い玉が零れる。

少女はそれを拾い、その場から逃げようとする。

「あまがみ
天神!!」

黒狼獣が魔力を狼の形に模らせ、噛み付く仕草をさせる。
だが何故かレイジが黒狼獣の肩を掴み、それを制止する。

「もついい、あれは神器じゃねえ、偽者だ」

黒狼獣はレイジの発言に呆気に取られ、技を途中で止める。

その隙に少女が煙玉を投げ、煙に紛れて逃げた。

「逃げられた……」

「だーから、あれは神器でも、魔力で作られたレプリカでも何で
も無かったんだよ」

レイジが言うにはあれは神器でもそのレプリカでも無く、全くの別

物の宝との事。

レイジは神器以外の宝には興味が無く、それを聞くと黒狼獣は「せっかく百年以上守ってきたのに……」と落ち込んでしまった。

「さてと……」

レイジが立ち上がると黒狼獣は寂しそう表情でレイジの顔を見つめる。

「いつちやうの？」

黒狼獣の問いにレイジが頷くと黒狼獣はより一層寂しそうな顔をする。

「ははは、じゃあお前も来るか？どうせもつやる事無いんだろ？」

レイジの言葉に黒狼獣は不思議そうな顔をする。

「えーと、僕が外に？」

レイジは無言で頷く。

「……………行く!!」

「うあ！舐めんな、汚ねえな！」

こうしてレイジの旅に黒狼獣がついていく事になった。

何処にでもいる犬耳少年（後書き）

犬耳少年……完全に自分の趣味です。
まあ、種族的には狼なんですが。

何処にでもある犬耳少年の名前（前書き）

今回も割りと短めです。

次回は多分割りと眺めなのでご容赦下さい。

何処にもある犬耳少年の名前

レイジと黒狼獣は荒野を抜け、町の中を歩いている。

「ちゃんと着いて来てるか、ウルフ？」

「……ウルフ？」

レイジが呼んだ名に黒狼獣は怪訝そうな表情を浮かべる。

「お前の名前だろ、狼だからウルフ」

人間に変化した黒狼獣、レイジに命名されたウルフはあまりにも正直な名前に若干吹出しながらもその名前が気に入ったようで鼻歌交じりに何度も自分の名前を繰り返している。

「所で僕の耳、魔物だつてばれないかな？」

レイジは笑いながらウルフの頭を撫でて答える。

「だいじょーぶ、世界にや魔物と暮らしてる奴はごまんといえるからな、それに今の姿は獣人にしか見えねえよ」

獣人、というのはこの世界の住人の一種で、亜人、と呼ばれる種族の一種である。

世界の彼方此方に亜人が存在しており、獣人の他にも様々な亜人がいる。

「さて、そろそろ飯でも食いにいくか？」

レイジがそういうとウルフの尻から尻尾が飛び出してパタパタと上下に揺れた。

不覚にも可愛いと思ってしまったのは内緒の話だ。

二人は現在、店で食事をしている。

「お前……意外と大食いなんだな……」

ウルフが遠慮無しに店の料理を注文しているのを見て、レイジは財布の心配をする。

まあ、そうはいつでも今までやってきた仕事の報酬は無駄な事に一切使っていないので、あまり問題は無い。

「おいウルフ、少しは遠慮しろ、金が無くなったらどうすんだ？」
レイジがそういうとウルフはウー、と唸り、残念そうな表情を浮かべる。

この狼は顔が非常に幼く、仕草も子供の物でしかない。

割と子供が好きな方であるレイジにとって最高の旅のお供だ。

「さて、そろそろ行くとするか……だーから、いつまで食ってんだ、行くぞ！」

「うっ……」

『何でも屋・キック』

レイジとウルフの目に入った店の看板に書かれた店名。

「何でも屋、ねえ」

「ねえ、何でも屋って事は神器の事も探してくれるかも？入ってみたい？」

そう話したウルフの頭をレイジが軽く小突く。

「神器ってのはなあ？自分で探すからロマンがあんだよ。他人に探すのを頼むなんて邪道だよ」

頭を擦りながら目に涙を浮かべるウルフを撫でるとレイジはウルフの手を取ってその場を離れた。

「さてウルフ、暫らくの間この町に留まるから宿を探しに行くぞ」

レイジの言葉にウルフは何故か残念そうな表情を浮かべる。

ウルフ曰く、せっかく遺跡から外に出たのに一箇所に留まるのはつまらない、らしい。

「んー、それについては大丈夫じゃねえか？何せこの町には俺の仕事場があるからな」

レイジの言う仕事場、とは世界戦士協会というネーミングセンスの拙い組織の経営する酒場だ。

そこは世界中から集められた依頼を戦士に紹介し、戦士がそれを解決すると言つ場所。

俗に言うギルドだ。

「へーなんか面白そう!」

目を輝かせながら言うウルフに口元を綻ばせながらもレイジは仕事の危険度について説明する。

仕事の中には個人への手伝いから魔物討伐まで様々な仕事がある。

「これだけ聞くと、どこぞのゲーム見たいだが、これは現実だ。死んだらダンジョンの最初から何てことはねえからな」

レイジの言葉を聞いてウルフは「げえむ?」と首を傾げるがこれは余談なのでそれは置いておく。

二人は次の日から仕事に行く事にした。

何処にでもある犬耳少年の名前（後書き）

世界戦士協会……自分でもダサイ名前だなと思います。
ええ、思いますとも。
次回をお楽しみに。

何処にでもある迷宮ダンジョン（前書き）

今回は話がいつもより長いです。

いつもが短いというのもあるかも知れませんが、それを抜きにしても長いと思います。

だから途中で飽きるかも？

何処にでもある迷宮ダンジョン

町に滞在してから二日目、二人は予定通りギルドに赴く。

そして渡された仕事内容は何と『何でも屋・キック』の調査。

昨日、店の前を通りがかつたのだが特に怪しい雰囲気は無かった。

レイジが調査内容を見るとそこには衝撃の内容が書かれていた。

『その店に向かって帰ってこない調査班が十四グループ。上級戦士のあなたに解決してもらいたい。お仲間は連れて行ってもいいが、実力の無い者は遠慮してもらいたい。以上。』

「実力の無い奴……なら問題はねえな？」

レイジがウルフに振り向くとウルフの足はプルプルと振るえていた。

「えーと、宿屋で待つてるか？」

「い、行く!!」

こうして二人は何でも屋・キックへ調査に向かう事になった。

建物の中へ潜入しては見たものの、怪しい事など何一つとして無かった。

それ所か客や店員までいた始末だ。

「全く、最近の政府はどうなっている事やら……ウルフもビビッて損したな？」

「うん……ていうかビビッて無いよ!!」

レイジは辺りを見回し、奥へと進む。

【グウウン】

「ん？ウルフ何かいったか？」

レイジがウルフに尋ねるがウルフは首を横に振る。

【グウウン】

音の出所は——地下からだ。

しかしレイジが辺りを見回しても下り階段らしきものは無い。客や店員もいつの間にか姿を消していた。

政府の情報は間違いでは無かった様だ。

レイジは軽く深呼吸をすると店の奥へと走り出す。

「行くぞウルフ！！やっぱこの店は何か臭い！！」

「うん！！」

二人は目の前のドアを開け、奥へと進んでいった。

後ろに立っていた男性の存在に気付かず――

レイジとウルフが店に入ってから十五時間。

店の奥には迷宮の様なものが広がっていた。

「なんだこれは……」

それにしてもこの建物は色々とおかしい。

外から見た時はこんな迷宮があるようなスペースは無かった。

精々一軒屋二個分ぐらいだろう。

迷宮の中には魔物もいて、まるで性質の悪いお化け屋敷だ。

レイジが一体どこのダンジョンゲームだよ、と一言。

「ねえ前も言ってたけど、げえむって何？」

「……今はどうでもいいだろ？」

レイジがウルフを撫でている間にまた魔物が襲い掛かってくる。

幸い、魔物の強さは大した事はない。

レイジかウルフ、どちらかの一撃で倒せる程度だ。

魔物を倒した後、レイジは壁を壊せない物かと壁に攻撃してみるが、

壁には傷一つ付かない。

「裏技は駄目って事か」

諦めてまた歩き始める。

暫らくすると下り階段が目に入りそこを降りるとまた違う構造の迷

宮。

それを繰り返してたどり着いたのは大きな扉の前だった。

「ボス登場〜ってか」

レイジがそういうと案の定、ゴーレムの様な魔物が現れ戦闘が始まる。

が、見た目ほど強くなかったので、戦闘は割愛。

レイジは米神に青筋を浮かべ壁を殴る。

「いい加減にしろ！こんなクソゲーつまんねえんだよ！ラスボスでも何でもいいから出てきやがれ！！」

レイジの発したいくつかの単語にウルフは疑問符を浮かべながらもレイジを真似して叫ぶ。

「アオオオオオン！！」

訂正、狼ならではの遠吠えだった。

するとどこからかクスクスと笑い声が聞こえ、ピエロの衣装を着た少年が姿を現す。

「いやあ、僕の用意したレクリエーション、つまらなかったかな？」少年の姿を見てレイジは頭に手を当て溜め息をつく。

「はあ、最近はガキに縁があるようだな」

拳銃の穢ちゃんといい、ウルフといい目の前のこいつといい、とうんざりした様子で数える。

因みにレイジは素直な子供は好きなのだが、生意気な子供は好きではない。

「ねえ、僕と遊んでよ？」

「ガキと遊ぶのは好きだがお前みたいなガキは嫌いだね」

つれないなあ、と少年が薄ら笑みを浮かべるとレイジは再び米神に青筋を浮かべる。

「お前は何かしたいんだ？人を迷路に閉じ込めたり子馬鹿にしたり、お前みたいなガキは大っ嫌いだ！！」

レイジが吠えた後、少年はくるりと体を回転させると急にフフと笑いながら玉乗りを始める。

その様子に痺れを切らしたのかレイジは長刀を鞘から取り出す。

「おい、クソガキ、あんまり大人をからかすと……グフツ！？」

「レイジ！？」

レイジが言い終わるのを待たずに少年は大きな玉をレイジの腹に向かって蹴り飛ばした。

そして手を口元に当てクスクスと笑う。

「もう一回……」

足元に転がって来た玉をもう一度レイジに向かって蹴り飛ばす。
先ほどの一撃もあつてか、レイジはその場に蹲り、身動きを取れないで居る。

レイジはいつも小さな子供には優しい、というか甘い。

先日の少女の時も倒す事は出来たのに子供には甘く、宝を逃がした。
レイジに向かって飛んだ大きな玉をウルフが素早く弾く。

「レ、レイジを傷つける奴は許さないぞ!!」

虚勢を張って少年を威嚇するものの、如何せん足が震えているので
迫力が出ない。

少年は右手をスウッと上に上げ、ウルフの顔を殴ろうとする。

ウルフがそれを弾くと少年はまた薄ら笑みを浮かべる。

「あ、天神!!」

ウルフが狼のオーラを展開し、少年に噛み付かせる。

《実力の無い奴……それなら問題ねえな?》

ここに来る前、レイジが自分に言った言葉。

レイジは自分を信頼して言ってくれたのだから自分はそれに応えなければいけない。

まだ数日しか一緒に行動していないが、大好きなレイジの為に。

「……邪^{じゃ}烈^{れつ}気!!」

ウルフは両手両足全てを使って攻撃する。

ウルフが纏うオーラは身体能力を上げるための物だ。

少年の肌や衣服を切り裂き、僅かながらもダメージを与える。

「もういい、ウルフ、十分だ」

そんな中、レイジが復活し、戦闘に加わる——かに思えたが、
そう言うことでは無かった。

「テメエの正体は既に分かった、姿を現しやがれ」

何を思ったか、レイジは少年の頭上を雷を纏った刃で切り裂く。
すると少年はその場に倒れこみ、ピクリとも動かなくなった。

「人形使い、自分で動く事は少なく、人形を操って攻撃する戦士の事、つまりお前だ」

レイジが指を差した方向には少年と同じ衣装を着た青年。心なしか顔が似ている気がしないでもない。

「あらら、ばれちゃった」

青年は自分の頭を小突き、舌を出す。

「可愛くねえんだよ変態野郎、何が目的だ？」

青年はにこりと笑うだけで質問に答えようとしない。さらに心なしか姿が歪んでいる。

「幻術か……」

レイジとウルフは気が付けば店の中に立っており、調査隊員達は奥の牢屋に捕らえられていた。

「仕事は成功したんだかどうなんだか今一釈然としねえな」

「うーん、恐かったけど頑張ったよ！」

そういったウルフをレイジが撫でるとウルフは嬉しそうな顔をする。

「ま、報酬はキツチリ貰っておくか」

そういったレイジの顔は笑ってはいるが、何かを考えているような表情だった。

………さっきのガキは拳銃の穢ちゃんと雰囲気似ていた。

同じ組織の人間か、それともただの思い違いか。

どっちにしても厄介な事には変わりねえか。

レイジはウルフを連れて世界戦士協会のギルドに仕事の報告に行った。

何処にでもある迷宮ダンジョン（後書き）

子供がよく出てくる小説…まあウルフは年齢的には大人なんですけど。

黒狼獣という種族的にも……

何処にもあるドラゴン伝説（前書き）

今回、三人目の仲間にしてヒロインが登場します。
ヒロイン…にする予定です。

何処にでもあるドラゴン伝説

町に留まって三週間、ウルフも戦闘に慣れてきた様で、大分自身もついた様子だ。

精神年齢が成長したせいか、身長も少しだけ伸びたのだが、レイジにベツタリなのは相変わらずだ。

二人は暫らくギルドで仕事をこなして来たお蔭で財布の心配は暫らく必要ない。

今二人が目指している場所は丘の上にある一軒の民家、レイジの昔の知り合いがいるという場所だ。

レイジはそこに預け物をしていると言うので、引取りに行くのだ。二人が乗っている馬車が丘を登り、目的地に到着する。

レイジが金を払うと馬車はそくさとその場を去ってしまう。

それを心当たりがあるのか、レイジは軽く苦笑する。

「婆さん！生きてるかー!?」

レイジが扉の前で叫ぶと家の中でガタンガタンと大きな物音が聞こえてきた。

「レ、レイジ……一体こんな所に何が？」

ウルフの問いに答える前に扉が勢い良く音を立てて開く。

「あーら、よく来たねえ、そっちのガキは連れかい？坊や！」

中から出て来たのは物語に出てくるような悪い魔女のような老婆だった。

片手には包丁を持っており、ウルフは叫び声を上げる寸前で口を押さえた。

「ひーっひひ、何だそっちのガキ！肝っ玉が小さいね！」

自分の姿に怯えたウルフに魔女さながらに高く笑うとウルフの目に涙が浮かぶ。

「まあいいよ！入りな！」

このやたらと不気味で声の大きい老婆に恐れを成したのかウルフは

レイジのジャケットの中に頭を隠して尻隠さず、状態になる。

「恐いのは見た目だけだから安心しろ……ウルフ」

老婆の名前はガイスト。

若い頃から此処で医者をやっている。

免許も持っている上、医療の腕はとてもいいのだが、外見が異様なため、周りの人間には闇医者と思われる。

先ほど馬車が逃げたのもその為だ。

ガイストが二人に茶を出すと、レイジの方は迷わず啜るのだが、茶の色が緑色をしている為、ウルフには変な薬にしか見えない。

尤も、茶自体はただの緑茶なのだろうが。

「婆さん、あいつはどうなった？」

「ああ、今喧しく賑かいとるよ、起こしてくるかい？」

「起こしてもらわなきゃここに来た意味ねえだろ」

レイジとの会話にガイストは声を上げて笑う。

一体何がそんなに可笑しいのか、部屋を出て行くまでその笑いは止む事は無かった。

ガイストが戻ってくるとその後盛大な足音が聞こえ、レイジがクツクと笑う。

「レイジ！ やつと来た！ 遅いー！」

レイジと同じくらいの年頃の女性がレイジに飛びつくとレイジはそれを華麗に避ける。

「相変わらず騒がしいな、ウィリア？」

悪戯そうに笑うレイジをみてウィリアと呼ばれた女性は二カッとした。

このウィリアという女性はレイジがウルフと出会う前にチームを組んでいた女性であり、フルネームをウィリア・カーマインと言う。以前レイジとの仕事中に大怪我を負い、知り合いの医者であるガイストに預けられたのだ。

そして今回、怪我が治ったとの報告を受け、ウィリアを迎えに来たという。

そしてウルフもウィリアには直ぐに懐いたようで今は隣で談笑をしている。

「ねえねえレイジ、神器は見つかったの？」

ウィリアの問いにレイジは否定の意味を込めて肩を竦める。その様子にウィリアはあからさまに肩をがっくりと落とす。

「えゝ、一つぐらいは見つけてると思ったのに……私がいないとダメっばい？」

「お前がいても見つかってねえよ、神器は見つけるのムズイんだ……」

レイジ達はガイストに傷薬等を貰った後、ガイストの家を後にした。三人は地図を広げて次の目的地を決める。

「あ、ここは？神官の遺跡」

「ここはもう行った。ウルフの実家だ」

その後歩きながらあーでもない、こうでもないと話した後にようやく決まったのは昔よく地竜がすんでいたと言われる森林に決まった。

三人は森林に向かう途中に日が暮れた為、キャンプを張って休む。目的地の森林は誓いの森と言われているらしくその近くの村では今でも竜がいるとされている。

そこに村で取れた作物等を捧げる事で翌年も豊作を約束されるといふ。

「……そして捧げ物を怠ると地竜が村を滅ぼしに来るらしい、とまあこんな伝説が伝えられているらしい」

レイジが森林の伝説を二人に語るとウルフは目を輝かせながら、ウィリアは拍手をしながら聞き入った。

「レイジすごい、物知り！」

「竜かあ……会って見たいけど恐いかも……」

レイジはこういう伝説や昔話には何かと詳しい。

それでもレイジのお頭は余りよろしくない方で、バカと天才は紙一重、とはよく言ったものだ。

三人は明日に備え今夜はもう寝る事にした。

何処にもあるドラゴン伝説（後書き）

ドラゴンファンタジーな世界には結構いると思うんです。

テイルズオブイノセンス然り、フェアリーテイル然り、ブレスオブ
ファイアしかり、ドラクエ4、5然り。

そもそもドラゴンはファンタジーな生物ですしね。

ファンタジー良いな、ファンタジー……（ばわわーん）

何処にでもいそうな貴族のあるドラゴン

現在レイジとウルフ、ウィリアの三人が何をしているか、それは実際に見てもらったほうが分かりやすいかもしれない。

何故なら誰も伝説上の生物、ドラゴンと三人が楽しくお食事しているなんて思いつかないだろう。

事の発端は数時間前に遡る。

レイジ達は森林の中を進み、段々奥に進んでいく。

その途中でウルフが巨大白蛇に驚いたり、ウィリアが果物を取ろうとして人食い植物に襲われたりと散々な出来事が起きた。

それも本当に村民が捧げ物をしているのかと疑いたくなる程に。

「レイジ！お腹減った！何か頂戴」

我儘を言ったのは最後尾を歩いていたウィリアだ。

「……そこら変に木の实生ってるだろ」

「やだ！こつちが食べられる！」

ウィリアが我儘を言うのも無理が無いといえば無理が無い。

もうかれこれ四時間以上も歩き続きで神器など陰も形も見えない。

その途中で魔物や植物に襲われているのだからエネルギーの消費が半端無い。

「ウィリア、僕のパンあげる」

ウルフがウィリアにパンを差し出すと年上のプライドがあるのかそれを遠慮する。

尤も、実年齢はウルフのほうが上なのだが。

【ズシーン】

「レイジ……なんか足音」

【ズシーン】

「聞こえるな……」

【ズシーン】

「聞こえるねえ……」

【ズシーン……ピタ】

「久しぶりの客だな……ゆっくりしていきたまえ」

三人が後ろを振り返るとそこには全長三メートル程の地竜が居て、手には仕留めた熊が抱えられていた。

そして地竜の住処に招かれ今に至る。

地竜の性格は極めて温厚だ。

熊を仕留めておいて温厚なのか、と思うかもしれないが、それはただの食料調達で、人間や小動物には優しく接する。

翼と繋がった腕で熊を調理し、レイジ達の前に差し出す。

元々獣であるウルフは迷い無く齧り付くのだが人間の二人は硬直状態、分かりやすくいうとガイストの家の時と立場が逆だ。

地竜の住処には巨大鍋や棚、テーブルなどが置いてあり、生活観溢れる空間となっている。

地竜曰く、人間からの捧げ物らしい。

「で、人間さんが、何のようだい？」

地竜はレイジ達を興味深そうに見つめる。

その顔はもう大体予想がついている顔であり、試している顔でもある。

「神器を探してる。場所を知ってたら教えてくれないか？」

レイジは竜の挑発にあえて乗り、単純に、恐れは無い様子で答える。

「フッフ、単刀直入だね、気に入ったよ、こっちだ、着いて来なさい」

地竜が案内した先には以前見たことのあるレプリカと違う、魔力の輝きがあった。

レイジは、ウィリアは、数年の冒険経験からそれが本物である事が人目で分かった。

「一昔……我らの主は数千個のレプリカと四個の本物の神器を下僕

である魔物に任せ、様々な所に隠したと言う。もちろんウルフ君もその一体だろうね。尤も、ウルフ君の守っていた物は別物だったよ
うだが」

レイジが神器に手を伸ばすと地竜がそれを制止する。

「本物の神器には結界が張ってある。それは神器を守る魔物を認めさせる事によって解除されるんだ。もし解除のされないまま触れると……」

地竜はこの先は言わなくても分かるね、とレイジの手を離す。

レイジはゴクンと生唾を飲み込むと地竜に向かって不適に微笑む。

「あんたを認めさせるっていうのはあんたを倒せばいいって事か？」

「そうだね、試験の方法は私に任されているからそう言うことではない」

レイジは分かりやすくいい、と苦笑しながら剣を抜いた。

それに続いてウルフとウィリアも戦闘に体制入った。

何処にでもありそうな戦闘による試験（前書き）

今回ちょっとグダッてるかもしれませんが。

え？いつも、そうですかすみません…

（独り言乙）

何処にでもありそうな戦闘による試験

口から巨大な岩の塊を吐き出し、それを三人に向けて弾く地竜はまだ一撃も三人から攻撃を食らっていない。

レイジも、ウィリアも、ウルフも地竜の猛攻を避けるのが精一杯で、近づく事すら出来ない。

レイジは岩に剣の腹を当て、受け流すように避ける。

「氷の精よ……」

ウィリアはブツブツと詠唱を唱え、得意の魔法を放つ。

岩の動きを氷の壁で止め、その隙のウルフが地竜の後ろに回りこむ。

「邪烈気……」

蹴り、突き、肘打ち、頭突き、と体の全てを使ってようやく地竜を攻撃する事に成功する。

地竜は小賢しい、とばかりに尻尾でウルフを払う。

地竜は片足を大きく上げ、勢いよく地面に打ち付ける。

すると地面が多きく揺れ、三人は足を取られる。

「どうしたんだ？もう終わりかい？」

地竜がやれやれとがっかりした様子で溜め息をつく。レイジはまだまだ、と飛び掛っていく。

「二連雷剣撃！」

雷を纏った剣で一回、二回と地竜を斬り付ける。

しかしレイジの攻撃はまだ止まない。

左前足を横に一閃し、動きを鈍らせ、背中に飛び乗って翼の付根を切り裂く。

呆氣にとられてたウルフとウィリアも我に帰って攻撃に加わる。

十分ほど攻撃を続けた後、三人は地竜から距離を取る。

「どうだ……もう終わりか……」

レイジは息を切らしてるにも関わらず、地竜を挑発する。

「はっはっは……終わりのない戦いが無いだろうか？」

レイジとウルフはすぐさま構え、ウィリアに関してはもう終わりだ
と思ったのか座り込んでいた。

「油断大敵……ってね」

地竜は口から砂利を交えた砂嵐をウィリアに向かって吐き出す。

ウルフがウィリアを抱えて避けようとするが砂嵐はウルフごとウィ
リアを攻撃する。

「チェックメイト」

そう、呟いた後レイジに向け、大岩を吐き出す。

「チェックメイトはまだ早いぜ……」

レイジは長刀で大岩を真つ二つにして地竜の背に立つ。

「ウィリア達は気絶したからな…… やつと本気を出せる……」

結論から言おう。

レイジは最終的に一人で地竜に立ち向かい、そして敗北した。

尤もレイジは上級戦士という名の通り、実力はかなりあるのだが、
残念ながら上には上がいたようだ。

因みにウィリアは初級戦士で、ウルフは協会に登録していないため、
肩書きは無い。

地竜曰く、本物の神器を護っている魔物は自分とほぼ同じ実力らし
い。

「まあ中々筋は良かったが、私に負けた以上、神器を渡すわけには
行かないね」

「ははは、しゃあねえな、もつと強くなつた時にまた来るか」

レイジは残念そうに、尚且つ潔く神器を諦める。

ウルフはそれでいいのか、という顔をするが、レイジとウィリアの
表情を見るに、それでいいらしい。

レイジ達は神器こそ手に入れることが出来なかった物の、地竜から
新たな情報を得ることが出来た。

遠くにある町で一年後に戦闘技術を競う大会があるとの事。

案外何処にでもありそうな大会だが、地竜が言うにはそこは他とはレベルが違うと言う。

「一体何処の少年漫画だ……」

「レイジって時々意味の分からない言葉使うよね……」

「レイジはちよつと訳ありなのよ……」

三人は他愛も無い会話を交わした後、馬車に乗って目的地へ向かう

何処にでもありそうな戦闘による試験（後書き）

今回出てきた大会、ザ 少年漫画の王道！

いや、別に少年漫画じゃ無いですけど……自分厨なんでこんな展開
しか思いつかない……涙

何処にでもいる強い侍

地竜に敗北し、武闘の大会のある町に向かってから十一ヶ月。

後一ヶ月で武等大会、名称をミーティア・フェスティバルという祭りも兼ねた大会が始まる。

二ヶ月前に大会が行われるというティアタウンに着いた為、その間にウルフの戦士登録を行う。

因みに協会的にはレイジがリーダー、ウィリア、ウルフがその部下と認識されているらしく、手続きは全てレイジが行う。

尤も、このチームには部下、上司という組織的な物は無く、唯の冒険者なのだが。

大会に出場出来る人数は四人。

「一人足りねえな」

地竜も教えてくれたら良かったのに、とウィリアが溜め息を付く。

「それで、どうするの？この町で無理行って誰かに入ってもらおう？」
ウィリアの問いにレイジはある事を思いつく。

それは自分達の他にもメンバーが足りなくて困ってる戦士がいるのでは無いかという事。

そもそもこの大会が四人の出場と言う情報はつい先日決まった事だ。これなら一人で此処に来て途方に暮れてる者がいるんじゃないかという事をレイジは言いたいのだ。

「なるほどお、それならあつしが入る隙もあるというもんですね」
そういったのはレイジでも、ウィリアでもウルフでもなく、紋様が書いてある赤い着物に丸い眼鏡をかけたオールバックの白い髪色をした男、青年と言うには無精髭が生えているが中年と言うのにも若すぎる。

何とも不思議な雰囲気醸し出した男だ。

「誰だよ？あんた」

レイジが思わず尋ねると男は何処からか三味線を取り出し、ベベン

と鳴らす。

「あつしは和の国から来ました、トットリ・シュウゼンと申す者でして、多少腕に覚えがある物の、この大会は四人いないと出場できないと言う衝撃の事実！如何がした物かと日々なんとなく路銀を稼いでいたら！なんとなんと、あなた達もめんばあが足りないと言うではありませんか……って人の話は最後まで聞いてー！」

シュウゼンと名乗る男性が自分の状況を語っている内に三人はその場から立ち去ろうとしていた。

現在レイジ達はシュウゼンと食事をしながら話をしている。

因みにシュウゼンの奢りだ。

シュウゼンの話は先ほど自分で語った通りで、路銀の方は三味線の演奏で稼いでいたとの事。

そしてシュウゼンが仲間に入れてくれ、という要望には即了解した。元々後一人が誰でも良かったのもそうだが、シュウゼンは自分で言った通り、腕が立つからだ。

レイジ曰く手の平の胼胝たこがそれを物語っているとの事。

どうせ出るなら優勝を目指さないとな！レイジが五十万」という賞金の価格を見て言った言葉だ。

シュウゼンと出会ってから早十日で、大会の前哨戦が開かれた。

サバイバルマッチの勝者二チームがシードの席を設ける事が出来るとの事だ。

因みに後のシード二席は別の会場で行われているらしい。

レイジが長刀を抜き、ウイリアが手の平に魔力を集中させる。

ウルフも先ほど店で買った皮製の手袋を着用し、シュウゼンは腰に差してある二本の刀を構える。

「右に握るは黒刀・春水しゅんすい……左に握るは白刀・秋炎しゅうえん」

シュウゼンは刀を手にした途端、今までお茶らけていた表情を一変させ、他の選手を睨みつける。

審判が試合開始の合図をすると共にシュウゼンが他のチームの内の二チームを一瞬でなぎ払った。

その後一チームを雷撃で気絶させたレイジも負けてられないと他選手を倒していく。

ウルフとウィリアの二人は見ているだけで何もする事が無かった。

一人の剣士がシュウゼンに斬りかかる。

シュウゼンは、片方の刀で相手の剣を止め、もう片方の刀で相手の腹を横に斬る。

「二刀剣技……のれんめく暖簾捲り」

敵の剣を暖簾に見立て、片方の刀でそれを弾き、もう片方の刀で敵を攻撃する、二刀流だからこそ出来る技。

シュウゼンは剣の背で相手の首筋を打ち、意識を刈り取る。

「安心しろ、峰打ちだ………な〜んちゃって」

シュウゼンは他の選手を二チーム残し、全て気絶させると最初出会った時の様にお茶らけて見せる。

「ほんと、凄かった！これなら優勝も夢じゃないよ！」

予約した宿でウィリアが若干興奮しながらはしゃいでいるとシュウゼンに扇子で叩かれる。

「これこれ、油断しては駄目ですよ、あつしが幾ら強くてかつこよくて素敵に無敵なあん畜生といっても上には上がいるんですからね」
三味線を弾きながらそういうシュウゼンにレイジとウィリアは苦笑する。

因みにウルフは今レイジに抱っこされながらスヤスヤと寝ている。

「なあシュウゼンさんよあ、あんたその剣、何処で習ったんだ？」
レイジが聞くとシュウゼンは一際強く三味線を鳴らす。

「それはですね〜ヒ・ミ・ツ！ですよ、なっはっは」

シュウゼンの戦闘中とのギャップに戸惑いながらもレイジは落ち着いてシュウゼンが入れた茶を飲む。

「………美味しいな」

シュウゼン曰く自分の国で大人気の茶を入れたらしい。

「さて、大会本戦まで後二十日だ。修行するなり休むなりは明日決めるとして今日はもう寝ようぜ」

レイジがそういうとウィリアは自分の部屋に行こうとする。

「ありゃ？同じ部屋で寝ないんですかい？ざんねん！」

「……バカ」

ウィリアは顔を赤らめながら部屋を後にした。

何処にでもいる強い侍（後書き）

新キャラのシュウゼンは結構前から考えていたキャラで、性格も前々から決まっていた。

・侍

・吟遊詩人

・三味線

・ふざけまくり

というのがシュウゼンのキャラです。

そして刀を握れば忽ち鬼神と化す……！！的な感じで書いて見ました。

感想お待ちしています。

何処にでもいる転生者（前書き）

タイトル通りです。

今までこれについて伏線を入れていたんでもしかしたら前から気付いていた人もいたかもしれません。

何処にでもいる転生者

辺りがしん、と静まり返った夜中二時ごろ、早い時間から寝ていたウルフが目を覚ました。

シュウゼンは大口を開けて寝ているが、レイジの姿が見えなかった。何処に行ったのだろうか、ウルフがレイジの匂いを追う。

廊下、広間、と言った後にベランダに出た。

このベランダは二階と一階が繋がっているようで、下の階からレイジともう一人、ウィリアの声が聞こえてきた。

二人っきりで何をしているのかな……？二人っきり……まさか！という妄想をしながら石畳を通じて聞こえてくる二人の会話に耳を傾ける。

「十九年……か」

レイジがいう十九年とはレイジの年齢と同じ数だ。

自分の年齢が何だというのだろう。

「早いね、レイジかこの世界に来て十九年も経ったなんて」

ウィリアの言葉にウルフは疑問を覚える。

この世界に来てから？レイジはこの世界の人間じゃない？いや、でもこの世界以外に世界なんてあるの？

ウルフは二人の会話を聞きながらその意味について考える。

「正確には転生してから十九年、だけどな」

レイジはウィリアの言葉をそう訂正する。

転生とは生まれ変わる事、死んだ者が同種の別の者または異種の姿になって再び生まれる事を指す。

レイジがそれだと言うのか、いや寧ろそれなら納得できる事もある。ダンジョンゲーム、ラスボス、漫画などのこの世界では聞きなれない言葉。

二百年生きているウルフでさえ聞いた事がないのだ。

「おんやぁ？ウルフ君、どうしたんですか？」

突然シュウゼンが目を擦りながら後ろから話しかけてきた。

ウルフは思わずワ！と声を上げる。

「……ウルフ、いたのか？」

「うん……」

下から聞こえてくるレイジの声に簡潔に、短く答える。

「……今の、聞いたか？」

「うん……」

「そうか、そりゃあしょうがねえな、今まで黙ってて悪かった。そんなじゃ、また明日」

——意外だった。

ウルフ的には盗み聞きした事を怒られるかと思ったのだがそんな事
は無く、簡単に事が済んだ。

思えばレイジの正確は出会った時からこうだった。

違う世界の人間？だからどうした、同じ人間だからいいじえねえか。
レイジならそう良いそうだと思ったウルフは思わず笑ってしまった。
翌朝も、その次の日も、レイジは今までと変わりなく接し、本当に
そんな事はどうでも良くなった。

レイジはレイジ、何処の世界でどんな姿形をしていたってそれだけ
は変わらなかった。

何処にでもいる転生者（後書き）

転生者レイジは何故この世界へ来たのか？そして神器を見つけて何を
するのか？

それは次回で語られます。

次回をお楽しみに。

何処にでもある(?) 転生トラック(前書き)

レイジがこの今の世界に来る前の物語です。

レイジが神器を探す理由とレイジの信念、そしてレイジの目的の様な者をこの話でお送りします。

何処にでもある(?) 転生トラック

上爪零一、それがレイジの以前の名前。
うわづめれいぢ

正確には前世の名前、だ。

トラックに轢かれる子供を助けると言う一般人の割には名誉の死を遂げたレイジ、もとい零一はあの世で神とやらにあった。

世界に生まれる全ての魂は死が訪れれば必ず生まれ変わると神は言うが、零一の場合は自我が強すぎて、転生しても記憶が残ったままだった。

零一はそれを神から聞くと思わず納得してしまった。

幼い頃から傍若無人で周りの大人が何と言おうと自分の正しいと思う事を貫き通す。

その結果が最高な物なのだから周りからの信頼も厚く、習い事である剣道も利き腕を痛めておきながら世界で一位に輝いた。

これが、レイジの前世の姿。

転生しても、正確は微塵も変わらなかった。

「零一！明日、予定空いてるか？合コンいかな？」

友人が零一に話しかけるとそれをきっぱりと断る零一の発言はこうだ。

「わりいな、俺出会いは自然なもんが良いんだ」

「合コンだつて自然じゃんよ」

「大体そんなチャラチャラした宴会は好まねえ」

真面目な男は詰まんないぞ、とブーイングをする友人を他所に、何となく携帯を見ると零一の携帯に一通のメールが届く。

『今の生活に満足しているかい？君の力を生かせる場所がある筈だ。さあ此方においでよ』

零一はパタンと携帯を閉じる。

「何処の宗教だよ……」

【キイイイ!!】

零一が一人で悪態を付くと遠くから暴走トラックが走ってきた。
そしてそこにはボールを追いかける子供が一人。

「な……」

頭より体が早く動いた。

今思えばあの時子供を見捨てていれば自分は助かっただろう。

しかし彼はそれをしなかった、いや、出来なかった。

この世界には珍しい、自己犠牲、自分の命より他人の命を優先する正義感を持っているかればもしかしたら懂れていたのかも知れない。漫画やゲームの主人公に。

だから剣道も気合が入った。

侍のように強くなるために。

自分の道を進んだ。

自分を信じる事が強さだと聞いた事があるから。

自分は一度死んだけれど、寧ろその方が良かった。

前に世界で自分にできる事は無い。

今の世界でできる事がある。

自己満足？何とでもいえ。

マゾヒスト？そうなのかもしれない。

でも俺は嫌なんだ。

他人を蹴落として、自分がヘラヘラ笑っているのが。

だから、だから俺はこの世界で強くなった。

この世界に生まれ変わった、いや、“生まれ直した”俺が神器を探すのは元の世界に帰りたいとかそういうんじゃない。

ただの男のロマン、それ以外の何事でもない。

神器に願えば何でも叶うと言うが、正直何を願うのかは考えてない。一生遊んで暮らせるだけの金？そんなの自分で仕事した方が自分の為になる。

世界一綺麗な嫁？そんなの、俺には荷が勝ちすぎる。

俺に願いが有るとするなら一生冒険すること、これに尽きる。

そして俺は――

「世界中を冒険して、仲間を作ってとにかく楽しく生きる」
これが俺の野望だ。

何処にもある(?) 転生トラック(後書き)

マゾヒストって自分で認めちゃったよ!

まあ、本当にそっちの趣味がある訳では無いですけど。

さて、これで一つ伏線回収しました。

これからどの様な物語が展開していくのか、お楽しみに。

(楽しめるかどうか不安ですが)

何処にでもいるかませ犬

ミーティア・フェスティバルが始まってから二日目、レイジ達はシード席の為、今日からの出場だ。

ルールは簡単で第一試合、第二試合は一对一で戦い、第三試合は二対二で闘う。

その中で二回勝利したチームが次の試合に進む。

勿論、第一試合と第二試合で連続勝利をしたら第三試合のタッグバトルはなくなるのだが。

先ず最初に戦うのはウィリアとディランという水の妖精。
要するに亜人だ。

妖精は魔法タイプの戦士が多いという事から、魔法使いであるウィリアが名乗り出たのだ。

「よい、始め！」

審判が合図を送ると妖精ディランが飛び回る。

元々身体が小さい為、素早く飛び回られると視線が追いつかない。

「木の精よ・大精霊の力を借り、君臨せよ！！股肱^{こつのおしん}之臣！」

ウィリアはここ一年で覚えた得意の属性魔法の内の一つ、樹木魔法を唱えて地面から動く木彫り人形を一体召喚する。

木彫り人形は腕から蔓を伸ばし、ディランを捕獲しようとする。

しかしヒョイヒョイと避けられ、掠りもしない。

木彫り人形は蔓や枝を伸ばして行き、やがては一本の大きな木となった。

「あつはつは、時間切れのようだね？今度はこっちから行くよ！」
ウィリアの使った魔法は使用時間に限界がある。

蔓を伸ばして敵を捕獲するのが目的の魔法だが、蔓を伸ばすには栄養が必要だ。

地面から栄養が無くなった時にこの魔法は使用不可となる。
だが、これはウィリアの計算の内だった。

ディランは水の妖精——この魔法の特性上、木に水分を吸い取られ、魔力を消耗する。

結果的にウィリアの圧勝と言っわけだ。

ディランのチームメイトに油断しすぎ、と窘められるがそれは違う。そもそもこの妖精のチームはシードに選ばれなかった言わば負け組みのチームだ。

レイジ達とはレベルが違う。

警戒しても無駄と言うほどレベルが違う。

ある意味本当の戦いは準決勝からだと言える。

あの子の戦いは全て勝利し、連続勝利を飾った。

翌日に準々決勝が行われ、レイジ達にとっては明日からが本戦だ。

シード席に座った他のチームはレイジ達と同じく、負け組みチームを簡単に負かし、手の内を全く見せなかった。

その点で言えばウィリアの魔法を見せたのは失敗と言えるだろう。

その夜、レイジは喉が乾き、売店へ飲み物を買に行った。

するとソファアに座っているたおやかな女性が此方に気付き、頭を下げる。

この国の紋章を身につけている所を見ると貴族か何かだろうか。

レイジも会釈して頭を下げた後、店員から茶を買う。

ブルタブを開けてそれを飲み干すとレイジはある事に気付く。

……なんですつとこつち見てんだよ。

レイジは敢て気付かない振りをし、自室に帰る。

女性が密かに涙を流したのに気付かず——

何処にでもいるかませ犬（後書き）

股肱乃臣——ここのしん、頼りになる家来のこと。
四文字熟女……ではなく四文字熟語です。
召喚した木彫り人形「家来」という事です。
次回をお楽しみに。

何処にでもいる女戦士

今レイジ達がいるのは試合会場の控え室。

準々決勝の準備がまだ終わっていないからだ。

こちらの一番手はウルフだ。

ウルフは緊張して足が震えているが、レイジに応援され、張り切ってもいる。

そしていつも着ている白い着物を脱ぎ、レイジに買って貰った服を着用する。

右肩の石製の肩当に茶色い革のベルト、そしてレイジとお揃いの黒いジャケットを身に着けた。

相手選手は“風神”の二つ名を持つユカヤという女戦士だ。

その出で立ちはインディアンを思わせる衣装を着用しており、背中には槍を背負っている。

これがシュウゼンが“その筋の人”から手に入れた情報。どうやって手に入れたかは本人しか知る事は出来ない。

『ウルフ選手、ユヤ選手、準備が出来たので会場へどうぞ』

控え室に放送が流れ、ウルフは生唾を飲み込む。

「が、頑張るから見ててね、レイジ」

レイジに笑顔を見せ、会場へと進んでいく。

手と足が同時に前へ進んでいるのはご愛嬌だ。

相手が使う槍のリーチは予想以上に長く、普通の槍より数倍程長さがあった。

しかもユカヤの槍術は達人級であり、素早さの高いウルフでさえ、避けるのが精一杯で、中々攻撃に移れないでいる。

「どうしたんだ！？避けてばかりでは勝てはせんぞ！」

この中世的な喋り方をするこの槍使いはウルフの動き一つ一つを追い、攻撃を加えようとしている。

それでもウルフに攻撃が当たらないのはウルフの成長を意味している。

少し距離を取り、天神を飛ばす。

ユカヤは槍の先端で天神を突き、天神の魔力を消し去る。

ウルフは負けじとそれと同じものを三つ飛ばすが、まるで爪楊枝で刺すように魔力の塊を消し去る。

「どうした！そんなもの私には効か……ぐ！？」

ユカヤの腹に、ウルフが先ほどとは比べ物にならない速さで鋭い爪を突き立てる。

気犬きけん——ウルフが数ヶ月前に習得した、自身の肉体に魔力を纏わせ、強化させる技だ。

今回は右手と爪に魔力を纏わせ硬くし、相手に爪を突き刺す犬鋼けんこうという派生技を使った。

ユカヤは少量の血を吐きながらもウルフを蹴り飛ばし、距離を取る。だがウルフはそれを阻止し、連続で突く。

「調子に乗るなあ……！」

【ガキッ……！】

ウルフの手刀が突如として制止させられる。

ユカヤの持つ槍は三つに関節が分かれる三節根でもあったのだ。

ウルフの手を三節根で縛り、腹を連続で蹴り飛ばす。

ウルフは痛みに耐えながら空いてる左手でユカヤの顔を殴りつけ、右手を解放した後、今度は自分から距離を取る。

「本気出すから、気をつけてね、お姉さん……！」

ウルフは人型から獣型になり、ユカヤに突進する。

気犬を使った時よりも更に素早くなり、今度は完璧に動きを追えなくなった。

「これで……決める！！“魔犬族”……！！」

ウルフの魔力は狼の姿を模り、それが十体、二十体と数が増えていく。

オリジナルの一体と共に魔力の狼が体当たりしていく。

「ぐ、こんなもの……!!」

ユカヤの周りには砂埃が立ち込め、二人の姿が見えなくなる。砂埃が晴れ、姿が見える頃になると、人型のウルフと、その足元には気絶したユカヤが転がっていた。

「勝者、ウルフ選手!!」

審判が勝ち名乗りを上げるとウルフもその場に倒れこみ、気を失った。

何処にでもいる滅茶苦茶強い金髪（前書き）

ドラゴンボールの超サイヤ人然り、ワンピースのサンジ然り、不死鳥マルコ然り、ネギまのタカミチ然り、ナルトの波風親子然り、金髪って強い人が多い気がします。

何処にでもいる滅茶苦茶強い金髪

ウルフの次はウィリアが戦闘に出る事になった。

こういつては何だが、ウィリアはチームの中で一番弱い。

本人もそれを分かっている為、ウルフよりも試合前のウォーミングアップに余念が無い。

もうじき試合が始まるので、ウォーミングアップを止め、休憩して息を整える。

「……………いつてくるね」

控え室に放送が流れ、ウィリアは試合会場へ向かう。

会場へ向かう為、ウィリアは途中のトンネルをゆっくりと歩む。

……………私が弱いのは十分分かってる。

だけどそれを理由にして甘えてなかんかられない。

だって、好きな人の前で格好悪い姿は見せられないから。

観客の声援にウィリアは右手を上げて応える。

先ほどのウルフの試合のお蔭で、観客にレイジ達のファンが圧倒的に多いのは嬉しい所だ。

「うわちゃあ……………相手が女な上に観客がこれかよ、やりにくいったらありやしねえ……………」

ウィリアの相手は中年で金髪の男性。

立ち振る舞いからして悪い人間ではなさそうだ。

レイジは控え室のモニターの前でほっと安心する

「女だからって手加減しないでくださいよ？」

審判が二人の戦闘準備が終わったのを見計らって選手紹介と共に試合開始を促す。

「自然の恵みを受けし若き魔法使い、ウィリア対金色の超大砲、ギリユウ！！試合開始！」

試合開始と共にギリユウはウィリアと距離があるのにも関わらず拳

を振り下ろす。

すると魔力の塊がまるで隕石が落ちたかのように試合会場の地面にクレーターを作る。

「おれあ、ユカヤとは全然ちげえぞ。棄権するなら早めに……な？」

「……迂闊だったか」

レイジはモニターの前で舌打ちをする。

「こりゃあ、ウィリアさんの勝利は危ういかも知れませんか」

シユウゼンはウィリアの後に試合が控えているのにも関わらず握り飯を頬張りながら言う。

先ほど目を覚ましたウルフも、モニターの向こうで固唾を吞んで見守っている。

「ウィリアお姉ちゃん……」

「土の精よ・大精霊の力を借り・私を護れ！！地霊盾！！」ちれいじゆん

ウィリアは詠唱を唱え、土の盾でギリユウの魔力の塊、つまり魔法弾を防ぐ。

一回、二回、と魔法弾がぶつかる度に罅が入り、三回目で粉々に大破してしまう。

「つ、次よー！！」

次の手を打とうとウィリアは再び詠唱を始める。

だが、ギリユウに背後を取られ、思わず詠唱を止めてしまう。

「そんなちやちな魔法なんざ効かねえよ。詠唱すつから隙が生まれんだ」

ギリユウはウィリア目掛け魔法弾を放つ。

だがそれは地面にクレーターを作っただけで、ウィリアは避けて距

離を取った。

「穰ちゃん……わかんたろ？今のは中てらなかったんじゃない、中てなかったんだ。もう一度言う……とつとと降参しな。次は……中てるぜ？」

ギリユウはウィリアを厳しく睨み付けた。

「完全に相手のペースに吞まれてますなあ」

シュウゼンが茶を飲みながら試合を観戦する。

「の、呑気にそんな事言わないでよ！！」

ウルフが泣きそうな顔でシュウゼンに言う「シュウゼンは扇子でウルフの頭を軽く叩く。」

「まあそう取り乱しなさんな。相手は何度も降参を促しています。と、いう事は殺す、もしくは重症を負わせる気は無いんでしょう」

シュウゼンの言葉に頭で分かっていても今一納得出来ないウルフはモニターに映るウィリアを心配そうに見つめた。

「火の精よ・大精霊の力を借り、敵を焼き尽くせ！炎上陣！！」
えんじょうじん

これは今ウィリアが使える火属性の魔法での最強攻撃魔法だ。

審判が慌てて避難し、ウィリアから離れる。

「いっけえええ！！」

この魔法は自分の周り、四方八方を炎上させ、敵の体を焼き尽くす魔法。

勿論、これは試合で相手を殺してはならないのだが相手が相手なのでこれを使っても死なないと判断した故の攻撃だ。

【ドオオオオン！！】

突然、一箇所の炎が消し飛び、そこからギリユウが姿を現す。

「無駄だっつってんだろ？今の穰ちゃんじゃ俺には……勝てねえ！！」

ギリユウは両腕で魔法弾を放ち、ウィリアを攻撃する。

ウィリアは後ろに吹っ飛び、地面に横たわる。

「いったる？次は中てる、ってな。しつこい様だが、降参しな。俺は女を苛める趣味はねえんだ」

ウィリアは立ち上がるうとするが、足に力が入らず、再び倒れてしまふ。

「えー勝者、ギリユ……ふげ！」

審判がこれ以上の試合は続行不可能と考え、ギリユウの勝ち名乗りを上げようとするが、ウィリアに石を投げられ、言葉を遮られる。

「この試合をレイジ達が見てると思うとね、負けらんないんだ、竜との戦いの時も私が油断したからウルフを傷つけちゃったし、この大会ぐらい、良いとこ見せたいの……」

ウィリアはそう、啖呵を切ると再び魔法詠唱を始める。

ギリユウは内心、舌打ちをしながらウィリアに魔法弾を放つ。

「怪我しても恨むなよ！穢ちゃん！」

ギリユウの魔法弾がウィリアを襲う。

だがウィリアに中る寸前でそれは掻き消える。

魔力が吸収されたからだ。

チャントドレイン
詠唱吸収——詠唱中に敵の魔法が自分に命中する直前に詠唱を

完了させる事でその魔法の魔力を吸収する技。

これは本来ウィリア程度の初級戦士が使える技術では無いのだが、所謂火事場の馬鹿力という奴で成功させた。

——だが。

「ぐ……！！！」

取り込んだ魔力が膨大過ぎて、ウィリアの体が耐え切れなかった。

ウィリアは昏倒し、その場に倒れこんだ。

「しょ、勝者……ギリユウ……」

審判の勝ち名乗りが虚しく会場に響き渡った。

何処にでもいる滅茶苦茶強い金髪（後書き）

実を言うとギリユウは準々決勝相手チームの中で一番強いです。
次回をお楽しみに。

何処にでもある叱咤激励

現在レイジとシュウゼンの二人は相手チームの二人と試合を行っている。

相手チームは互いの連携が良く取れていて、一見即席タッグのレイジ達に勝ち目は無いと思われたが、何と二人の動きは長年一緒に戦ってきたような動きだった。

その訳は試合前に遡る――

ミーティアフェスティバルの出場メンバーが四人の理由、去年までは三人、若しくは五人で戦い、二回、若しくは三回勝利した方が勝ち、というルールだった。

だが今年は四人。

今年度はチームワークを計るための試合も用意され、三回戦はタッグバトルで行う。

レイジ達のチームは当然レイジとシュウゼンの二人が出て、二回目の勝利を狙う。

「あつし等はいくら強いといっても所詮は即席のちいむです。もしも、あちらさんが熟練のコンビねえしよんを繰り出してきたならあつし等に成す術はありません。そこで、です。お互いの役割を決めておきましょう。そうすれば……」

シュウゼンの長い話にレイジは耳を傾ける。

「簡単に言うが、役目を決めるってどんなんだ？」

「例えば――」

相手が同時に来た時は二刀流で、二方向に攻撃できるあつしが――

「！？」

相手チームの金棒使いタイクと武闘家アックマンはシュウゼンの素

早い対応に戸惑いを覚え、再び連携を取って攻撃しようとする。

大きな体のタイクが小柄なアックマンを後ろに隠し、突進してくる。

——あいてが連携技を使ってきた時は攻撃範囲とすぴいどが凄まじい、電撃を使えるレイジさんが緊禪きんこんいちばん一番、禪ふんどしを締めて対応してくださいまし。

タイクとアックマンは二人の完璧な動きを見て、冷や汗を掻く。

相手が一筋縄でいかないと分かった証拠だ。

「お前たち……タッグを組んで長いのか……？」

相手チームの問いに先ず先にシュウゼンとレイジが口々に答える。

「いえいえ、私達は、つい先日出会ったばかりでして……」

そして相手が弱みを見せたならば——

「二人で一緒に戦ったのは今回が初めてだよ」

——二人で一氣に叩く！！

「二連雷剣撃！！」

レイジがアックマンを切り裂く傍らでシュウゼンは一瞬でタイクの後ろに回りこんだと思うと刀を鞘に納める。

「二刀剣技……おうむせつしやう皇矛絶傷！！」

するとタイクの巨体に衝撃が走り、シュウゼンとは反対側に吹っ飛んだ。

レイジ達の勝利だ。

レイジ達は準々決勝の終了後、会場の広間で休憩を取っている。

「いやはや、あの武闘を使うものと金棒使い、思ったよりたいした事ありませんでしたねえ」

シュウゼンが茶を啜りながら先ほどの試合に関して話す。

あの二人はシュウゼンの言うとおり、実力自体は大したことが無い。恐らくチームワークが良かっただけで、恐らく二人共ギリユウはおるか、ユカヤよりも弱い。

つまりはレイジ達が適材適所を実践出来なかったという事だ。

シュウゼンがギリユウと戦っていたなら或いは——という話が

出たのだが、済んだ事を話しても仕方がないとシュウゼンが話を打ち切る。

「まあ結果的に勝てたからいいじゃない」

ウルフがそう言うが、ウィリアとしては簡単に割り切れない物である。

そんな中、隣の席に見覚えのある二人組みが座ろうとしていた。

「ん？お前は……」

レイジは隣のテーブルに腰を下ろそうとしていたユカヤとギリユウに気付く。

「な、何故貴様等が此処にいる！？」

ユカヤが威嚇しながらレイジ達を睨みつける。

するとレイジは当然の様にこう答える。

「何故って、ここは誰でも使える食堂だからだろ？」

レイジは呆れた様子でユカヤを見る。

「まあまあ、いいじゃねえの。ユカヤもそんなに歯を尖らせるなつて」

「だ、誰が尖らせているか！！」

結局、ギリユウが強引にユカヤを引っ張り、レイジ達と食事をする事になった。

「あの、ユカヤさん。あの、あの時はゴメンナサイ……」

ウルフがおずおずとユカヤに謝罪を述べるとユカヤはふん、と鼻を鳴らす。

「あれは真剣な試合で、私も本気でやっていた。貴様が謝るのは筋違いだぞ、坊や」

ユカヤは口ではそう言っている物の態度は悔しい、という思いを露

骨に表している。

そんな中、ギリユウがあー、コホンと咳払いをするとウィリアに話しかける。

「えーと穰ちゃん、怪我とかしてねえか、俺、強くやりすぎちまつたからな」

ギリユウの心配を他所にウィリアはユカヤに習って試合ですから、と笑顔を見せる。

そうかい、とギリユウは安心して珈琲を飲む。

「それにしても、槍使いの穰ちゃん、普段はあの衣装きてねえんだな、可愛いぞ？」

レイジはインディアン衣装では無く、白いワンピースを着ているユカヤを見てそういうとユカヤは顔を真赤にする。

その姿は年頃の女性そのものだ。

「ば、ば、ば、馬鹿者！誰が可愛いものか！普段からあんな姿をしていたらただの気違いだろう！！」

慌てるユカヤを見てレイジは面白そうに笑みを浮かべる。

レイジのSな部分が発動したようだ。

「え？十分可愛いと思うぞ？あんな槍の達人がこんな可愛い格好をしているなんて意外ダナー？」

本人はからかっているだけなのだが、可愛い可愛いと連呼するレイジに剥れている者が一人。

「ウィリアお姉ちゃんどうしたの？」

「……別に」

「私達を負かしたんだ！せめて決勝まで行かんと引つ叩くからな！！」

別れ際にユカヤにそう言われ、レイジ達は気合が入る。

明日は準決勝。

体力を温存する為、今日は早く寝なければいけない。

男三人とウィリアはそれぞれ自分の部屋へ向かい、緊張した夜を過

ご
し
た。
。

何処にでもある叱咤激励（後書き）

はつきり言ってタイクとアックマンはモブです。
しかしギリユウとユカヤは……
次回をお楽しみに。

何処にでもいるミノタウロス（前書き）

決勝戦までは基本楽勝に進んでいたりします。
ギリユウとユカヤは決勝で出す予定だったのですが、諸事情にて、別のチームにしました。

何処にでもいるミノタウロス

準決勝第一試合を戦うのはシュウゼン。

相手は怪力ギユウランドという何故か闘牛などではなく、ホルスタイン牛の毛皮を着た筋肉質の男。

見た所、大剣を使うパワータイプの様だ。

「うっしっし！こんなヒョロヒョロした優男なんて楽勝だうっしー！」

やけに牛を強調する男をみてシュウゼンは苦笑する。

「あいつ……負けるね」

観客席から仮面をつけた青年がそう呟いた。

その後ろには三人、チームメイトと思われる男女が控えていた。

「よくあれで勝ち残ってこれたよね、キャハハ」

仮面の男の上の席で自分の膝に頬杖を突きながら口を開く若い男。

その横の席の少女が詰まらなそうな顔で青年に寄り添う。

「観戦、詰まらない……」

そして仮面の男の下の方で青髪の男が深く溜め息をつく。

「フー、ぬりいな！俺ならこの会場の戦士全員一秒で殺せるぜ！」

「無理な事は言わない方がいいよ」

試合状況は誰もが予想したとおりシュウゼンが優勢である。

ヒラリヒラリとギユウランドの攻撃をかわし、隙を見せる度に刀で一閃する。

「モー！！本気を出すうっしー！！」

「させるとお思いですかい？」

本気をだそうと体に力を入れるギユウランドの太い腕を足場に彼奴の頭に飛び乗る。

「二刀剣技……肉線断絶！！」
にくせんだんぜつ

シュウゼンはギュウランドの頭の上でしゃがみ、二本の刀で両肩の肉から神経までを斬る。

これで試合は続行不可能——に思えたが——。

「きかーん！うっしっしー！」

神経を斬ったのにも関わらず、頭の上のシュウゼンまで手を伸ばし、右手でシュウゼンを鷲掴みにする。

「く……奴さん、獣人でしたか」

シュウゼンの目の前にはホルスタイン牛の獣人が不適に微笑んでいた。

「うっしっし……形勢逆転、モウ、お仕舞いだ！うっしー！」

左手に握る大剣の鍔でシュウゼンを思い切り殴る。

この戦いで殺人が禁止されてる故の攻撃だが、彼奴の怪力でこれをやられたら一溜まりも無いだろう。

「ぐ……奴さん中々お強いですねえ、その強さに免じてあつしを逃がすつてのはどうですか？」

「よし、逃がしてやろう……ってそんなわけないだろう、うっしー！——」

シュウゼンのボケに付き合いながらも攻撃の手を緩めないギュウランド。

二回、三回とシュウゼンを殴るもシュウゼンは降参の意を示さない。四回目、一際力を入れてシュウゼンに殴りかかる。

「……なんだ手ごたえがねえな、潰れちまったかうっしー！」

ギュウランドが自信の右手を確認するがそこにシュウゼンの姿は無かった。

「これだけは使いたく無かったんですがねー、まあ、負けてはどうにもなりませんし、お披露目しましょう！トトリ流忍術！！」

シュウゼンの姿がその場から消えるが、ギュウランドの体に一閃、二閃と刀傷が増えていく。

「忍法・刀鼬の術！！」

「ぐああああ！！」

ギユウランドは叫び声を上げ、その場に倒れこむ。

それと同時に見えなかったシュウゼンの姿が再び浮かんできた。

「勝者、シュウゼン選手！！」

会場に驚きと沈黙が走り、今一何が起こったのか理解が出来ないでいた。

「シュウゼン！！お前何だあの魔法！？」

レイジが驚いた表情でシュウゼンに尋ねる。

シュウゼンの方は冷や汗を掻きながらあー、だのえーと、だの説明に困っている。

「あつしのあの術は忍術と申しまして……何処でどう習得したかは追々お話しますよ」

レイジは腑に落ちない表情でシュウゼンを見つめる。

「あ、弁当はつけーん！頂き！」

当のシュウゼンは誤魔化すように控え室に置いてあった弁当を食す。

「……ま、いつか」

レイジが諦めた瞬間、控え室に放送が流れる。

次に戦うのはウィリア、準々決勝の汚名を挽回せねばならない。

ウィリアは気合をいれ、勇躍試合に挑む。

何処にでもいるミノタウロス（後書き）

作中にて、本当の戦いは準々決勝からと申しましたが、レイジ達が苦戦しながら戦うのは決勝からとなります。

（もしかしたら決勝自体がなくなるかも）

準々決勝と準決勝はある理由でギリユウ&ユカヤを目立たせる為に作った様な物ですので。

次回は無理かもしれませんが、決勝から本腰入れて書きますんで、宜しく願います。

あ、勿論その前の話もちやんと書きますよ？

何処にでもいるミノタウロスとゴリ男（前書き）

ごりおお！おめえゴリ男でねえかぁ！

……幼いころ見たドラえもんの映画ににそんな場面がありました。
だからなんだという話ですが。

何処にでもいるミノタウロスとゴリ男

試合会場のど真ん中、選手がその力をぶつけあう場所に盛大に爆発音が響いている。

それは何と準々決勝での負け試合を帳消しにするかの様な魔法を放つウィリアの仕業だ。

ウィリアは爆炎魔法を詠唱無しで次々と放つ。

と、いうのもその訳は準々決勝でのギリユウとの試合にあった。

ギリユウの魔力を詠唱吸収で自分の物にしたウィリアはまるで別人の様に相手選手を圧倒的に劣勢に追い込む。

尤も、ギリユウから吸収した魔力が底を尽きればいつもの魔力量に戻るのだが。

「爆炎撃……！！これなら勝てる！！」

魔力をこれでもかと言うほど発散させるウィリア。

無様に逃げ惑う相手選手。

この勝負の結果はウィリアの勝利に終わる——かの様に思えた

が突然、爆炎の威力が著しく下がる。

ギリユウの魔力が切れ、いつもの魔力量に戻ったからだ。

「てめえ……よくもやりやがったな……」

先ほどのギリユウランドと同じく、筋肉質の男が体に入れると、男はゴリラの様に姿が変わる。

「ぶち殺す！！」

ゴリラ男がウィリアに殴りかかろうとした瞬間、会場にあるものが投げられる。

【パサ……】

「タオル……？」

「まいった……ウィリアの負けだ！！」

タオルを投げたのはレイジだ。

これでウィリアの敗北が決まる。

尤も、この大会には仲間がタオルを投げたら選手は敗北、というルールは無く、ただ単純にレイジが乱入したから負けになったただけなのだが。

どうして！どうして余計な事するの！？私、まだ戦えたのに！！」
ウイリアがそういうとレイジは優しく頭を撫でる。

「本気でそう思ってる訳じゃねえだろ？あのまま試合を続行してたらお前は大概我負ってたぞ？感謝はしても文句はいうなよ、な？」

「……馬鹿！」

ウイリアは控え室から走って出て行った。
レイジの頬にビンタを食らわした後で。

「——ッ馬鹿！」

馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿！レイジの馬鹿！！

ウイリアは試合会場の直ぐ近くにある路地裏で木箱を蹴飛ばす。
それに乗っていた猫に気付かなかった為、少し申し訳なく思う。
なんで私あいつの事好きなんだろ……。

ウイリアは先ほど自分が引つ叩いたレイジの事を想うとまた怒りが湧いてきた。

そんな時。

「うつしっし、何をイライラしてんだ？」

「俺様達が慰めてやるうか？」

突如、ウイリアに声を掛け、先ほどウイリアとの戦いに勝利したゴリラの獣人、リンラとシュウゼンとの戦いに負けた牛の獣人、怪力ギユウランド。

「何よあんだ達！あっち行ってよ、私は今機嫌が悪いの！！」

ウイリアが怒鳴ると獣人二人組みはにた、と面白そうに笑う。

「うつしっし！！奇遇だな、機嫌が悪いのは……俺達も一緒だ！！」

ギユウランドはそう怒鳴るとウイリアの肩を掴み、服を破り取る。
下着が露わとなり、ウイリアは慌ててそれを隠す。

「ウホッ！いいなあ、そそられるねえ、」

リンラは興奮したからか、鳴き声がゴリラのそれになる。

ウィリアは貞操の危機に陥り、目に涙を浮かべながら獣人達から後ずさる。

「ウホ！いただき……」

【ドゴォー！】

獣人達がウィリアに飛びかかるうとした時、獣人達はウィリアとは逆方向に吹っ飛ぶ。

「こんな可愛い穠ちゃんを襲ったあ、お前ら、よっぽど助平なんだな！」

「汚らわしい、万死に値する……！」

何とギリユウとユカヤがその場に現れ、獣人達を睨みつける。その威圧感に、獣人達は尻尾を巻いて逃げる。

「へー、そんな事があつたのか、でもそりゃあ、穠ちゃんだって怪我するのは恐えだろ？」

「背中への傷は戦士の恥だが、貴様にはそんな事はあるまい？」

その後、ウィリアはギリユウ達にレイジとの出来事を話した。

二人は思いのほか親身になって話を聞き、ウィリアを慰める。

「いいえ！私は怪我するのなんて……死ぬのだって恐くありません！」

「嘘つけ、さつき泣いてたじゃねえか」

「あ、あれは……」

ギリユウは口ごもるウィリアの頭を撫で、諭すように話しかける。

「死ぬのが恐くねえ何てな、それはロボットか何かの言葉だ。死ぬのは誰でも恐えさ、俺も、ユカヤも、な」

ウィリアは表情を沈めながら、はい……とギリユウに相槌を打つ。

「さあ、坊主^{レイジ}に謝ってきな！まあ、怒ってやしねえだろうさ」

ウィリアは気が向かないまま、レイジ達の待つ控え室へと戻って行った。

何処にでもいる悪魔

ウィリアは納得のいかないままレイジ達の下へ戻り、勝手に部屋を出て行った事を謝る。

勿論、レイジはギリユウの言った通り、怒ってなどいなかった。

因みに、準決勝の相手チームは先ほどのギユランドとリンラの愚行により、連帯責任で相手チーム全員が失格になった。

勿論観客からはブーイングが起こるが、主催者側からの“サプライズゲスト”の登場により、それは歓声へと変わる。

そのゲストとはティアタウンの東にある城の王女、ミーティアその人であった。

『観客の皆様——百年以上続く今大会のお越しいただき、誠にありがとうございます——この国の王女として本当に嬉しく思います——』

「あの姉ちゃん……この国の姫だったのか……」

レイジが言うように、会場の中心に立つこの国の王女はレイジ達の初試合の夜、レイジの事を見ていた女性であった。

王女のにこやかな表情と、その美しい声に、観客達は歓声を送る。

——だが、次の王女の発言に、観客達の表情が凍りつく事になる。

『だが——決勝戦はもういらぬ——!——!——』

王女の発言の後、その周りに九人の男女が現れ、さらに会場の出入り口に壁が地面から出現した。

そして王女自身も九本の尾が生えた化け狐となり、表情に元の輝く様な美しさは無く、別の、妖艶な美しさとなっていた

壁に逃げるのを阻まれた観客達の心情は様々だ。

何故姫様が化物に、俺達は国に騙されていたのか、などと全てが恐怖と戸惑いに包まれていた。

これを一大事と察したレイジ達とギリユウとユカヤは化け狐とその

手下らしき男女達が立っている会場の中心へと走る。

「お前等……何もんだ？」

レイジが九尾狐に問うと九尾狐はニタリと笑う。

「我の名は九尾狐のクミホ、二つ名を“九魔”のクミホと言う者じや……九つの魔を尾に宿し、幻夜会を束ねておる」

九尾狐の尾に宿る九つの魔、とは自分を含む、九つの感情の事を指す。

傲慢の堕天使。
ルシファー
リヴァイアサン

嫉妬の海獣。
サタン

憤怒の悪魔
ベルフェゴール

怠惰の女嫌。
マンモン

強欲の二首烏。
ベルゼブル

暴食の蠅王。
アスモデウス

色欲の魔蛇。
メフィストフェレス

虚飾の道化
ファルファクス

憂鬱の伯爵。

そしてそれを束ねるのが金欲を司る九尾狐、クミホ。

クミホは和の国で生まれ、後に異国でこの九つの魔を尾に宿し、それを自分が見込んだ人間や亜人に憑依させたという。

レイジはクミホの話を聞いて、一つ腑に落ちない事がある。

「何でそんな話を俺にする？その話からお前の弱点等を見出す可能性だってあるだろ……？」

レイジは疑問を率直に口にし、クミホに問う。

「……我のもう一つの意味がそうさせた……とでも言おうかの」

一瞬、クミホの顔が悲しそうな表情になる。

「我はこの国の財産を支配し、いずれ世界を取る……その為に人間はじゃまよの？我が僕達よ！！人間共を皆殺しにするのじゃ！！」
その掛け声と共に、九体の悪魔の内の六体が人間達を襲いに掛かった。

レイジ、シュウゼン、ウルフ、ウィリア、ギリユウ、ユカヤの六人

はそれぞれ活動している、悪魔達を止めに入った。

何処にでもいる悪魔の化身（前書き）

こんかい、ちよつくら残酷描写が入ります。

ですが今のところ今回だけなので、タグには付けないで置きます。

何処にでもいる悪魔の化身

クミホの手下の九体の内、六体が会場内の人間達を各所で襲っている。

それをレイジ、ウルフ、ウイリア、シュウゼン、ギリユウ、ユカヤが止めに入るため、それぞれ悪魔の元へ向かう。

残りの活動していないクミホと手下三体は動く気配が無いので、動き出す前に六体を倒さなければいけない。

まず最初に悪魔と遭遇したのはウルフだ。

青い髪の人間の姿をした悪魔は人間達に火を放っている。

「や、やめろお!!」

ウルフが精一杯声を張り上げて悪魔の注意を此方に向ける。

悪魔は不良宛らにああん?と返事をし、ウルフの方へ踵を返す。

「てめえ、魔物だよな?匂いで分かるぜ……何で人間の味方をしやる?」

悪魔に睨みつけられ、ウルフの表情は強張るが、それでも悪魔の問いに答える。

「レイジ達はいいい人だから僕は一緒にいるんだ!」

それを聞いて、悪魔はそうじゃねえ、と質問の意味を詳しく説明する。

「俺達魔物は人間より優れた生き物だ……それが何故支配でなく、共存しなければいけないんだ?」

悪魔は近くににいる逃げ遅れた人間の背中を自分の爪で突き刺し、人間は悲鳴を上げる暇も無く、まるで元から生きていなかったかのようにその場に倒れる。

悪魔は人間の背中から爪を抜き、付着した血液を舐めた後、にやりと笑う。

「人間は弱え。少し刺しただけで直ぐに死にやがる。俺達魔物は例え銃で撃たれても死んだりはいしねえ」

悪魔は倒れた人間の頭を踏みつけ、頭蓋骨を踏み砕く。

人間の頭蓋骨はまるで林檎が潰れたようにぐしゃ、と音を立て、粉々に砕ける。

「人間の骨は脆い。少し力を入れただけで直ぐに粉々になる。魔物は例え例え骨が折れたって一週間もありや、くつつく」

悪魔は狂ったように人間の骨を砕き、肉を引きちぎる。

最早人の形をしていない、血に濡れた肉塊を悪魔は自分の口の中に放りこみ、噛み砕いた後、胃に

流し込む。

「人間は俺達の食料でしかねえ。そんな人間がどうして俺達と対等な存在でいれる？なあ、てめえもこっちへ来いよ、今なら俺の舎弟にしてやるぜ？」

悪魔は血に濡れた拳をウルフに見せ、手を開くとそこには人間の目玉が転がっていた。

「い、嫌だ！！」

ウルフは足の振動を抑え、悪魔の誘いを拒む。

悪魔はまるでその答えを最初から予想していたかの如く、にやりと口角をつりあげる。

「そうかよ、腰抜け、お前はあくまで下等種族とお友達でいたいのか

……」

悪魔のつりあげた口角から牙が生え、悪魔の肌は黒に染まる。

「……俺は地獄から来た憤怒を司りし悪魔^{サタン}の化身！名をイーラ！牙の抜けた愚かな裏切り物に罰を与えに来た！覚悟しやがれ、腰抜け野郎！！」

こうして、ウルフとイーラの戦闘が始まった。

何処にでもいる悪魔の化身（後書き）

イーラ、とはラテン語で憤怒を意味します。

決して、あさ。らみ。み40歳、何だかイライラする！のイラでは
ありません。

話を書いているうちに気付いたんですが、ギリユウとユカヤのフル
ネームがこの先に書く所、あるにはあるんですが結構先なんですよ。
と、いう事で後書きにて紹介。

ギリユウ：ギリユウ・イエローファルコン

ユカヤ：ユカヤ・フレッシュミン

以上です。

何処にでもいる無口な女とスケベ爺

シュウゼンは廊下を走り、悪魔から逃げている。それは決して恐れをなした訳では無く、悪魔を観客達から遠ざける為であった。

幸い、悪魔は現在シュウゼンだけを標的にしている為、観客達から遠ざかったシュウゼンは思う存分戦う事が出来る。

そしてシュウゼンが悪魔と遭遇したのは一時間前の事――

シュウゼンは観客達を襲っている悪魔を発見し、勝負を挑む。

後ろから斬りかかれれば良いものを、態々此方に気付かせるのは武士道を掲げる侍たる所以だ。

因みにその悪魔は遺跡でレイジとウルフから赤い宝玉を奪った、ラィフルと拳銃を使う少女である。

シュウゼンとギュウランドの試合の時も観戦していたのだが、レイジは気付かなかった様である。

「その綺麗な悪魔のお嬢さん、此処では難ですからあちらの方で闘やり合いませんか？」

色黒の肌をした色黒の悪魔は「はい」と顔を背け、無言でシュウゼンの言葉を拒絶する。

周りには観客達がいて、此処で戦うとそれらを巻き込む可能性があるのだが、悪魔はそれを利用したいらしい。

「……それにしてもお嬢さん、お肌が荒れてますねえ」

シュウゼンの言葉に悪魔は「ピクン」と反応する。

シュウゼンはかかった、とばかりに挑発を続ける。

「どうやら発育もまだまだな様ですし……女性の悪魔は妖艶ないめえじがありました、実際の所それでも無いんですねえ、なっはっはっは！」

「……殺す」

悪魔はシュウゼンに殴りかかるが、シュウゼンはそれをヒヨイと避け、あるう事が自分の尻を悪魔に向けてペンペンと叩いた後白目を向いて下を出す。

「悔しかつたら此処まできなさい！なっはっはっはっは！！」

シュウゼンは悪魔を挑発した後、その場から逃げ出した。

悪魔は米神に青筋を浮かべた後、しばしの間沈黙する。
すると悪魔に尻尾が生え、肌には鱗が浮かび上がる。

「肉、引き千切ってバラバラ……」

悪魔は、空中を浮遊し、泳ぐようにシュウゼンを追いかけた。

そして今に至る。

「私は海中から来た嫉妬を司りし、海獣の化身、リヴァイアサン名前はインヴィデア。悪魔を馬鹿にした愚か者に罰を与えに来た……絶対に許さない、死んで後悔して……」

シュウゼンとインヴィデアが戦闘を始めた頃、別の場所でも戦闘が起きていた。

ウィリアは槍を持った老いた悪魔と遭遇した。

老いた悪魔は男性は相手にせず、女性だけを攻撃していた。

攻撃、とは言っても肉体的なダメージを与える物理攻撃ではなく、セクハラによる、精神的攻撃なのだが。

ウィリアは若干近寄るのに躊躇いながら、少しずつ近寄り、魔法詠唱を行う。

「火の精霊よ・大精霊の力を借り・花を咲かせる！爆炎撃！」

ウィリアはリンラとの試合の時に見せた火属性の爆発魔法を使う。

尤も、その爆発はリンラに使った時とは比べ物にならないほど弱い。

「ひよひよ！？あつちい！！」

悪魔は奇声を上げた後、ウィリアを見つけてにやりと口角を吊り上げる。

ウィリアは一步、後ずさるが直ぐに魔法詠唱をする。

「木の精霊よ・大精霊の力を借り・君臨せよ！股肱乃臣！」
コウゴノツツ

ウィリアは木彫り人形を召喚し、老いた悪魔を束縛する。

その間に、観客達、主に女性を優先的に逃がした。

「ひよひよー！！」

しかし、何時の間にか悪魔はウィリアの背後に回っており、ウィリアを槍で突き刺す——ではなく、尻を触る。

「きゃあー！！」

ウィリアは思わず拳を後ろに振り回すが、既に悪魔の姿はそこに無く、木彫り人形が変化した木の枝の上に立っていた。

「ひよっひよー！！ワシは女のいる所なら何処にでも行ける！女の後ろだろうと、前だろうと、上だろうとなー！！」

ウィリアは悪魔に向かって女性の敵、変態、などと罵声を浴びせるが、それはこの悪魔にとって全て褒め言葉である。

悪魔が体に入れると蛇の尻尾、右側に牛、真ん中に人、左側に羊の頭に変化する。

さらに足もダチョウの物へと変化し、何とも異様な姿となる。

アスモデウス

「ワシは女の夢の中から来た色欲を司りし魔蛇の化身！名前をルクソリア！けしからん不埒な女共に罰を与えに来た！！可愛がつてやるから覚悟しろー！！」

ウィリアとルクソリア、戦闘開始。

何処にでもいるチャラ男と女性不信の男

会場の東出入り口で戦っているのはギリユウ。

各所の出入り口にある巨大な壁を魔法弾で破壊し、観客達を逃がした後、豹柄の毛皮を来た悪魔と遭遇する。

悪魔はサングラスを掛けなおした後、ギリユウの方を見てニタリとわらう。

「ちいゝす、あんたがおれっちのお相手？明らかに真面目そうだね、あんた？」

チャラチャラした悪魔は首の骨をコキ、と鳴らしガムを口に入れる。さらにそれを膨らましてパチン、と破裂させる。

ギリユウはそれを見てイライラするが、戦闘に支障をきたさない様に心を落ち着かせる。

「ずいぶんとチャラチャラした悪魔だな、そんなに戦えんのか？」悪魔はギリユウの発言を聞いてヒユウ、と口笛を鳴らした。

「あー、それ、それ聞いちゃいます？強いよゝ、おれっち、驚くほど強いよゝ！」

お茶らけている悪魔を見てギリユウはどうしても苛立ちを隠せない。しかし、次の瞬間、ギリユウは警戒せざるを得ない状況に陥る。

それは一瞬。

一瞬でギリユウの鳩尾に拳を入れ、ギリユウは吐血してしまう。

「ほら、強いっしょ？」

悪魔は素早く後ろに跳躍すると、噛んでいたガムを吐き捨てる。

そしてニヤニヤと薄ら笑みを浮かべたまま、身体に力を入れる。

するとその姿は四枚の羽がある、巨大な蠅となり、昆虫特有の目玉がギョロリとギリユウを睨みつける。

そして分厚い唇が口角を吊り上げ、薄気味悪い笑みを浮かべる。

「おれっちは糞山から来た暴食を司りし蠅王^{ヘルゼブル}の化身！名をグロア！綺麗な奴等に罰を与えに来た！美味しく喰ってやるから覚悟しな！

！」

ギリユウは魔法弾を展開し、グロアに撃ちは放った。

ユカヤが遭遇したのはこれと言って特徴の無い男の悪魔。強いて言えば顔の作りが一般的に男前、と言われる類の顔である事か。

ユカヤは悪魔を見つけると、直ぐに槍で攻撃する。

因みに今の姿はインディアンの衣装を着ていて、本人曰く、これを着ると気合が入る、らしい。

「テメエ……後ろから攻撃するたあ、卑怯じゃねえか、人間の癖によお！！」

そうユカヤを批判するとユカヤは鼻で笑う。

「何が卑怯だ、戦いにそんな物は無い。そもそも貴様等悪魔も似たような物だろう？」

ユカヤの発言に悪魔はピキ、と米神に青筋を浮かべる。

その後盛大に溜め息を付き、突然声を張り上げる。

「戦いがどうかの前にテメエ等女はいつもそうだよ！自分勝手な上に他人の事は棚に挙げるわ、仕舞いには大勢で男にキーキ文句言うわ、その癖自分の非は絶対に認めやしねえ！俺は女って生き物が大好きだよ！あー、女は面倒くせえ生き物だ！！この世から消えればいい！！死ね！！」

悪魔の主張にユカヤは若干戸惑いながらも、負けじと大声を出す。

「誰も貴様に好いてもらう等とは思わんわ！外道が！！グダグダ言わんで掛かって来い！！」

悪魔はユカヤを睨み付けた後、背中に刺してある大剣を構える。

さらに身体に力を入れると頭に二本の捻れた角が生える。

「俺は山の裂け目から来た怠惰を司りし女嫌の化身！名をアケーディアー！！面倒だが、卑怯な女共に罰を与えに来た！！さっさと終わらせるぜ！死ねえ！！」

アケーディアはユカヤに飛び掛っていった。

何処にでもいるチャラ男と女性不信の男（後書き）

悪魔たちのキャラ名は暴食、色欲などの七つの大罪の罪をラテン語で言った物です。

英語にするとハガレンになっちゃいますからね……

あ、アケーディアが女性の事をギャーギャー言ってますが、これは女性不信だからこそです。

僕がこう思っているとかでは無く、『女性不信』というキャラだからこういつてる訳です。

女性の方々、本当に失礼しました。

何処にでもいる金の亡者と怒り狂う悪魔と海の怪物

現在活動している最後の悪魔と遭遇したレイジは長刀を構え、悪魔に斬りかかる、

悪魔はそれを片手の人差し指と中指で挟み、長刀の動きを止める。

悪魔は背中に人形を背負っており、その人形は悪魔と同じ姿をしていた。

そして悪魔の姿は全体的に黒、である。

肌も黒、衣服も黒で染まっており、唯一つ色が違う所は背中の人形、人形の色は本体と対照的に真っ白な色をしている。

レイジは悪魔の指の間に挟まっている長刀を抜き、今度は足元を狙う。

しかし悪魔は靴の裏でそれを制止し、口角を吊り上げる。

【ガシッ】

悪魔はレイジの頭を両手で掴み、頭突きを食らわせる。

しかし、レイジは怯まずに、腹を蹴り飛ばす。

「……へえ、やるねえ」

馬鹿にするように言う悪魔にレイジはそりやどうも、と返す。

そして一旦距離を取り、レイジは雷の斬撃を飛ばす。

が、悪魔は右手でそれを握り潰す。

パリパリ、と僅かに残った電流が悪魔の手の中で少しずつ弱まってい

く。

「痛くねえのか？」

「少しいてえさ、けどな？」

悪魔は右手の薬指に光る指輪を天に掲げると悪魔の身体が光り、電流は収まる。

「こうすりや痛くねえ」

悪魔が両手をヒラヒラと振り、自分にダメージが無い事を見せびらかす様に振舞う。

「てめえは成金趣味か？」

悪魔の指には両手で合計六個の指輪が嵌められており、指輪についている宝石には様々な魔力が宿っていて、先ほどの電流を打ち消したのは指輪の一つは魔力を打ち消す効果を備えている指輪である。さらに悪魔はレイジに右腕の人指しを向けると、その空間に重力がかかり、レイジは辛うじて立っている状態になる。

「へえ、すげえな、普通の人間なら地面に這い蹲るしか無くなるのに」

さらに悪魔は右手中指をレイジに向け、火炎弾を発射する。

動く事のできないレイジに火炎弾はヒットし、そのまま後ろに吹っ飛ぶ。

皮肉にも、そのお陰で重力空間から脱したレイジは何事も無かったかのように立ち上がる。

「……ふん、結局は物の力に頼っている腑抜け野郎じゃねえか」

レイジの挑発を聞いて、悪魔はその通り、とそれを認める。

「俺は欲が強えからな、常に金品が近くにねえと落ちつかねえんだ……で、どうせならその宝石は戦闘に使える奴にしよう、って考えた結果が、この六つの宝石さ！」

ウヒヒ、と笑う悪魔はその後、突然、身体に力を入れる。

すると背中に背負った人形が動き出し、悪魔の隣に並ぶ。

そして悪魔と人形が互いに引き寄せあい、身体が同化する。

そして二つ首になった後、背中に翼が生え、その姿は二つ首の鳥人となった。

「俺は黄金の宮殿から来た強欲を司りし、二首鳥の化身名をアバリーチア！生きる価値の無い貧乏人共に罰を与えに来た！金の力に屈するがいいさ！！」

こうして、ウルフ、シュウゼン、ウィリア、ギリユウ、ユカヤ、レイジの全員が悪魔と戦闘を行う事になった。

ウルフと悪魔の化身、イーラは激しい戦闘を行っていた。

イーラは爪に付着した人間の爪をウルフの両目に向けて飛ばす。それが眼潰しとなり、ウルフは一步、二歩と後ずさる。

その隙にイーラは地獄の地獄から炎呼び、ウルフに向け発射する。

「獄炎発撃^{じくえんはつげき}！！」

その炎はウルフの身体に纏わりつき、床に身体を転がしても消えはしない。

そこでウルフは体から魔力を放出し、獄炎を弾き飛ばす。

が、そうする事で大量に魔力を消費してしまい、ウルフの呼吸は激しく乱れる。

「後先考えねえでんな事するからだ。ま、俺にとっちゃラッキーなだけだな！！」

イーラは爪に炎を纏わせ、ピアノを弾くかのような動作をする。するとウルフの頭上に黒い炎が出現し、それがウルフに直撃する。

「ククク……！悪魔^{サタン}の演奏^{ベッフォルメンツ}……！！踊り狂え！！」

獄炎がウルフのいた場所に一斉に落ち、その場に爆炎が舞う。

そして白煙が立ち込め、ウルフの焼け焦げた姿があるとイーラは思ったが――

そこにはウルフの姿が無かった。

「なんだ……消し炭になっちゃったか？」

そう呟きながら、煙を掃うが、煙はモクモクと立ち込めていて、窓を開けない限り、消える事は無い。

【ドゴォー！！】

突然、イーラの背中に衝撃が走る。

「野郎……生きてやがったか……？」

イーラは辺りを見回すも、如何せん煙が邪魔して姿がよく見えない。「こそこそ隠れていないで出てきやがれ腰抜けえ！！人間に飼い慣らされている内に誇りまで失ったかあ！？」

イーラの怒りの叫びに答えは返ってこなかった。

ウルフがとイーラが戦闘を行っている一方、シュウゼン^{リヴァイアサン}は海獣の化

身、インヴィディアと戦闘を行っていた。

インヴィディアは壁の中を泳ぐように移動し、シュウゼンの死角から攻撃してくる。

「おやおや……鬼ごつこの次はかくれんぼですかい？まだまだやんちゃ遊びが恋しい年頃なんですねえ」

シュウゼンが挑発すると背後からインヴィディアが姿を現わし、体当たりを仕掛ける。

しかしシュウゼンはそれをさらりと交わし、蛇の様な胴体に刀を一閃する。

「……妬ましい、その強さが妬ましい……この男が妬ましいー!!」
うねうねと体をくねらせ、人間の姿の時の無口な性格とは一変し、シュウゼンに嫉妬の言葉を投げかける。

「……どうやらそちらの姿が本性のようですねえ？先ほどの方がずっと愛らしかったですよ？」

インヴィディアは口から炎を吐きだし、鼻から黒煙を吹き出す。その黒煙は異臭を放っており、シュウゼンの感覚を鈍らせる。

「その綺麗な姿が妬ましい。その高価な着物が妬ましいー!!」

「おや、化け物にもあつしの着物の価値が分かるんですねえ、そうですねよ、これは家村八江門が仕立てた最高級の――」

シュウゼンが得意げに着物を見せびらかすとインヴィディアは長く太い尻尾をシュウゼンに向け打ち付ける。

が、シュウゼンはいとも簡単によけ、再び刀で一閃する。

「さて、ふざけるのはこれぐらいにしてそろそろ……本気を出しますかー!!」

シュウゼンの眼はそれまでと一変し、侍の眼に変わる。

それは今から“戦い”を始める合図であり、これを見せた時は一切容赦をしない。

「そのりりしい顔が妬ましい、貴様が妬ましいー!!」

瞬間、インヴィディアの鱗が黄金に輝いた。

「妬ましい、妬ましい、妬まっしゃー!!」

さらに図体が巨大化し、牙も一層鋭くなる。

額には三つ目の眼が開眼し、その姿は化け物、というより怪物、といった方がしっくりくる様になった。

『オオオオオオ！！』

地に響く様な叫び声をあげ、シュウゼンを睨みつけた。

『コロシテヤル！！』

シュウゼンは眼鏡を掛け直し、黒刀春水と白刀秋炎を持ち直し、勇躍インヴィディアに向かっていった。

何処にでもいる金の亡者と怒り狂う悪魔と海の怪物（後書き）

……リヴァイアサンの性格変わりすぎですね。

まあ「妬ましやー！！！」の方が本性という事で。

無口な性格は本性を抑えるために感情を殺してた……

という事にしておきましょう。

何処にもいる空け者と変態爺

インヴィディアの咆哮は会場内各所に響いており、それは地面が揺れる様な錯覚を引き起こした。

そしてレイジは二首鳥^{マンモン}の化身、アバリーチアとの戦闘で、新しい技を試していた。

それは微量の電撃を自身の体に流す事で身体能力を上げる事が出来ないか、という事だった。

脳から体に送られる命令は全て電気信号で行われている。

その為、その電気信号を強くすればどうなるか、という実験だったが、それは大成功だ。

アバリーチアの眼に追えない速さを身につけたレイジは次々と攻撃を加える。

「ぐう！！ならこつちも同じ事してやらあ！！」

左手人差し指にはまっている指輪の力を使ってスピードを三倍にする。

その事でレイジよりも速い動きになる。

レイジの電気信号強化は今の所二倍が限度で、これ以上力を強めると体がいかれてしまう。

「雷刃！！」

雷の電撃を五回放つ

そしてそれは意外にも全てアバリーチアにヒットする。

アバリーチアは苦痛に顔を歪め、何故、自分に攻撃が中つたのかを疑問に思う。

「なぜだ……スピードは俺の方が上のはず……」

アバリーチアの指輪の効果は動くスピードを上げる力だ。

しかし、レイジの電気信号強化は身体能力全てを上げる力。つまり動体視力も二倍になっていたという事だ。

次に使うのはアバリーチアは左手中指の指輪は大地の魔法。

床に触れると先ほど各所の出入り口に出現した石の壁がレイジの目の前に展開し、レイジにはインヴィディアの姿が見えなくなってしまう。

だが、石の壁を何と素手で壊し、再びインヴィディアに攻撃する。

「何故だ！？何故俺の能力が悉く破られる！？」

アバリーチアは取り乱し、自棄になって重力の弾をレイジに向けて無造作に撃ち放つ。

だが

それは全てレイジの放った雷にうち消されて、アバリーチア本体が剥き出しになってしまう。

「くそ！！くそ！！」

次は火炎弾を撃ち放ち、それに交えて石の弾、光の弾も撃ち出す。しかしそれもレイジの長刀によってなぎ払われる。

「もう、六個全部出たよな？テメエの手品は？」

「て、手品だと、これは俺の能力……」

アバリーチアの言葉にレイジは違う、とそれを否定する。

「その能力はテメエの能力じゃねえ、道具の能力だ、俺達戦士も武器は使うが必ずそれを極める。だがテメエはどうだ？己を鍛える事もしないで指輪の力に頼ってるだけじゃねえか。その上テメエ自身の魔力はこの上なく低い、それじゃあ指輪の力も半減されてしまう。結論から言つとテメエは弱い、俺の相手は務まらねえ。それに最初に言つたよな？テメエ腑抜け野郎だ」

レイジは一頻りそういうといアバリーチアの二つの首の分かれ目から、股まで一刀両断に斬り裂き、インヴィディアは叫び声を上げる。

「……………あの世で金でも数えてやがれ」

レイジはそう言つとアバリーチアの死体を電撃で消滅させた。

ウィリアが苦戦しながらも攻撃を放っている相手は魔蛇の化身、ルクソリアだ。

ルクソリアは駝鳥の素早い動きを利用し、ウィリアの攻撃を避ける。

そして隙あらばスカートを捲るという変態行為を行い、ウィリアの恨みを買う。

「もー！！ちゃんと戦いなさいよ！！」

ウィリアは怒りながらもルクソリアを攻撃し続ける。

一発だけ、偶々ヒットしたのが雷の魔法、雷鳴華^{らいめいか}だ。

それは攻撃範囲が広く、攻撃力もウィリアの使える雷魔法の中でトップクラスの威力だ。

この魔法が当たった影響は大きく、体が麻痺したルクソリアの動きは停止する。

「ヒヨヒヨー！！娘っこ！よくもやったのう！！」

にや、と気味の悪い笑みを浮かべたルクソリアは再び動き始め、今度はウィリアに体当たりを食らわす。

そしてそのまま押し倒し、ウィリアの頬を右手で鷲掴む。

「すこし、きつつい灸をせねばならぬのう……ただし、嫁に行けなくなるかもしれないがの！ヒヨヒヨヒヨ！！」

下卑た笑みを浮かべるルクソリアの顔面に一発、パンチを食らわすが、ルクソリアはピクリともしない。

ウィリアが貞操の危機に陥った時、ルクソリアの体が後ろに吹っ飛んだ。

先ほどアバリーチアを倒したレイジが偶然、ウィリアが襲われているのを見て、ルクソリアを蹴り飛ばしたのだ。

「おい、糞爺、俺の仲間は何しやがる！？」

レイジの言葉にルクソリアは先程と違って苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべる。

「……男は好かんのじゃがのう」

レイジが長刀を構えるとウィリアがそれを制止する。

「ごめん、レイジ、あの女の敵だけはこの手で倒したいの……………」

……………いいよね？」

ウィリアの台詞に異様に間が開いた事に若干恐怖を感じながらレイジはウィリアの意思を尊重する。

「但し、危なくなったら助けるからな？」

レイジの言葉にウィリアはうん、と短く頷く。

その後、女の敵事ルクソリアをきつく、睨み付ける。

そして、一呼吸置いた後、瞳に灯が点る。

「……火の精霊よ・雷の精霊と交わり・金色の花を咲かせる！！」
フュージョンチャント

融合詠唱——「二つ以上の属性を融合させ、新たな属性の魔法を使う技術。」

尤も、この技術は魔力が大量になれば使えないのだが、怒りによって魔力が引き出された様だ。

「花は散り・実は果汁で溢れ・爆発する！！」

詠唱を続けるウィリアの目は、ルクソリアだけを捉えていて、ルクソリアは魔力の渦のせいで身動き出来ないでいる。

【ドオオオオン！！】

火属性と雷属性の複合魔法、轟魔法は大きな音の膜でルクソリアを覆い、ルクソリアの鼓膜を破る。

ルクソリアは耳から血を流し、その場に倒れた。

轟魔法は雷のスピードと轟音、火の威力と広がる範囲を合わせ持っており、さらにそれに魔力が加わり、音の魔法に性質が変化する。

ウィリアはあの後、その場で卒倒し、レイジに所謂お姫様抱っこをされて安全な場所に運ばれる。

レイジは自分の腕の中で眠るウィリアの寝顔を見て、レイジが顔を赤らめる。

そしてウィリアから感じられた魔力にある変化が起きていた。

「魔力、上がってるな」

恐らく、先ほどの怒りで体に眠る魔力が覚醒したのだろうと推測する。

「それにしても……可愛いよな」

自分の知らない所で、自分が思いを寄せる男性がこんな事を言っているとは思えないウィリアだった。

何処にでもいる蠅と悪魔と女嫌い（前書き）

今回下品な描写があります。

そついうのがお嫌いな方はお気を付けを。

何処にでもいる蠅と悪魔と女嫌い

化物へと変化したインヴィディアの咆哮が鼓膜を刺激し、脳を揺らす。

ギリユウは一瞬、吐き気を催したが目の前の敵に集中し、それを堪える。

巨大な蠅へと姿を変えた蠅王^{ベルゼブル}の化身、グロアは盛り上がった唇の両端をつりあげ、さらに耳障りな羽音をブブブ、と鳴らしている。

グロアの口から、黄色い液体が吐き出される。

ギリユウはそれを避けるが、床に落ちたその液体はとんでもない悪臭を放つ。

「……痰かよ」

グロアは黄色い液体、つまり痰を次々と吐き出し、ギリユウに嫌悪感を与える。

「おれっちの痰、マジ良い匂いじゃね？」

やはり人間と蠅の嗅覚は作りが違う別物なのか、ギリユウはそう思わざるをえなかった。

ギリユウはグロアに向け、魔法弾を連射する。

その内のどれか一つでも中れば、そう思ったが次の瞬間、ギリユウにとって予想外な出来事が起きる。

グロアは自分に直撃しそうになった魔法弾をその大きな口で飲み込んだのだ。

「ウへへへ、おれっちは暴食だからな、何でもかんでも自分の栄養にしちまう訳、どう？すごいっしょ！？」

次に、グロアはギリユウの放った魔法弾をそっくりそのまま口から吐き出した。

それをギリユウに向けるとギリユウはもう一回、魔法弾を放って相殺する。

「なんつーやりにきい相手だよ……」

ギリユウの言葉に、グロアは薄気味悪く笑うのみだった。

ベルフェゴール
女嫌の化身、アケーディアと戦っているのは、否、“戦っていたのは”ユカヤだ。

戦っていた、つまり過去形。

戦闘はもう終了したという事である。

戦闘があつた場所には地に伏せているユカヤと悠然と佇んでいるアケーディア。

アケーディアはポケットに手をつ込みと露骨に舌打ちをする。

「何で俺が女の相手なんかしなきゃならねんだよ、面倒くせえ…

…どうせ後で女性に暴行したただの男の癖に最低だの文句言われんだよな……あゝやってらんねえ」

アケーディアがブツブツと愚痴を零しながらその場を立ち去ろうとすると、今まで倒れていたユカヤがアケーディアの足を掴む。

「馬鹿にされたものだ……女とはいえ戦士がそんな事を言うと思われているとは」

ユカヤが近くにある瓦礫を支えに、立ち上がるうとするとアケーディアは盛大に溜め息を付く。

そして大剣の先端でユカヤの脚の腱を斬るとユカヤは立ち上がれなくなる。

「もういいから立つな、触るな、近寄るな！面倒くせえから寝てやがれ！！」

面倒臭そうに、もう片方の脚の腱も斬る。

「そんじゃあな、お仲間に助けて貰ってくれ……それと二度と俺の目の前に現れるな」

後ろ手を振って、その場を立ち去るアケーディアの背をユカヤはずっと睨み付ける。

立ち上がるうにも腱を斬られた両足は力が入らず、少しも動かす事が出来ない。

「くそ……」

ユカヤの目から、涙が零れ落ちる。
悔しいのだろう。

自分の事、否、女の事を馬鹿にした彼奴を倒す事が出来なかったのが。

女だからこうだ、女だからああだ。

女は卑怯だ、女は、女は、女は――

「くそおお!!」

動かない脚が内出血を起こす。

そして傷つけられた誇りからも。

ユカヤは脚の激痛から、意識を手放し、闇に身を委ねた。

白煙が立ち込める中、イーラはただただ、攻撃を受け続けていた。
ウルフが白煙に紛れてイーラを攻撃していて、ウルフは鋭い嗅覚でイーラの居場所を突き止めて攻撃している。

これは嗅覚の鋭い犬科で狼型の魔物だからこそ出来る技である。

イーラも嗅覚は人間より発達しているのだが、匂いを辿る事において得意分野であるウルフには遠く及ばず、さらにウルフは魔力を纏う事によって自身の匂いを掻き乱している。

「おい、腰抜け!! いつまでこんな事続けるつもりだ!? テメエのしょぼい攻撃なんか!! 効かねえんだよお!!」

イーラが叫ぶも、帰ってくる答えは皆無。

イーラは内心で舌打ちをする。

その後イーラが窓硝子を殴り、硝子に穴を開ける。

白煙は見る見るうちに外へ逃げ、段々とウルフの姿が見えるようになる。

「テメエ…… ほう、そっちが本当の姿かよ?」

ウルフの姿はレイジと出会った時の、黒狼獣の姿だ。人間の姿の時より、パワーは劣るもの、此方の方が素早く動ける事が出来、嗅覚も発達する。

「魔犬族・巨犬!!」

魔力で模った大きな狼を二体召喚し、イーラに嚇ける。

「……ふざけてんのか？」

しかしその二体の狼を素手で消し飛ばす。

「テメエ、正面からやっただって俺には敵わねえって、さっき実証済みだろが？そして不意をつく方法も今はねえ」

イーラは炎を纏い、ウルフに歩み寄る。

「つまりテメエは、文字通り負け犬になる訳だ、腰抜け！！」

身に纏った炎をウルフに撃ち放つ。

ウルフの素早い動きでも、獄炎を避ける事が出来ず、火達磨となってしまう。

「これで……仕舞いだぜ！」

イーラの獄炎の黒色が濃くなりそれに合わせるかのように温度も上がる。

ウルフの頭上に落ちたそれは、ウルフの体を黒焦げにする。

イーラは、ウルフが倒れたのを見届けた後、主人であるクミホの下へ戻っていった。

何処にでもいる蠅と悪魔と女嫌い（後書き）

七つの大罪 + α の九体は二勝です。

やっぱ全部正義側が勝つとつまらない、という考えからこつなりました。

元々つまらないかも知れませんが。

何処にでもいる死亡フラグを連発する奴

現在、ギリユウの魔力は数値に変換すると百のうち六十となる。何故其処まで減っているかというそれはグロアの能力にある。

それは相手の打ち出した魔法等を飲み込み、自身の魔力に言う物である。

ギリユウの魔法弾はグロアにダメージを与える事無く、全て飲み込まれている。

だが、ギリユウは魔法弾を放つのを止めようとはしない。

「うひひひ！！なんだ、あんた実は馬鹿なのか！？おれっちに魔力をくれるなんて！！」

調子に乗って魔法弾を飲み込んでいくグロアだが突然、ギリユウの手が止まり、魔法弾の嵐は止んだ。

「今頃遅いぜ！おバカさん！！」

グロアは飲み込んだ魔力を吸収し、自身の魔力に変換する作業を行う。

だが、ギリユウの魔力は胃袋に留まったまま、何の変化も起きない。

「人のもんはそう簡単に手に入れられねえって事だな」

ギリユウがゆつくりとグロアに近寄る。

若干、腹黒い笑みを浮かべているのは気のせいだろうか。

「よく考えてみるんだな。どうして俺が真正面からテメエに攻撃したのかを」

ギリユウの魔力はグロアの腹の中にある訳だが、それは全てギリユウが態とグロアの口の中に放った者だ。

それはギリユウが魔力の濃度を濃くしたものであり、グロアが自身の魔力にするには少し、自身の魔力が低すぎた。

つまり――

「テメエの魔力が俺の高すぎる魔力を受け入れられなかったっつー事だ！！」

ギリユウが態とグロアの口の中に魔法弾を放つとグロアの体は段々と膨れ上がっていた。

「わ、わかった、俺っちが悪かった！！だから……」

「今更何言つてんだ蠅野郎？」

命乞いをするグロアにギリユウは笑顔でそれを拒否する。

「お前は此処の人間たちを襲っていたんだ。だから俺が制裁を与える……この図に間違いはねえだろ？」

ギリユウはグロアに背を向け、三、と一言呟く。

「だから俺が……たずけ……」

「二、一」

グロアの体は膨れ上がり、その巨体で天井を破壊する。

「ヴァー……！！」

「零」

【ドオオオオン！！】

グロアの肉片が辺りに飛び散り、ギリユウは離れた場所まで避難する。

そしてグロアの中で爆発した魔力がギリユウの中に戻り、魔力が回復し、ギリユウは戦闘前と同じ状態になった。

「俺の相手をするには十年はええよ、バーカ」

ギリユウは魔力の感じる方に足を進め、その場から立ち去った。

リユウは離れた場所で気絶したユカヤを発見する。

そして脚の腱が切れている事が分かり、調度近くにあった医務室から包帯を拝借し、ユカヤの両足に巻く。

そしてユカヤを背に背負ったギリユウは安全な場所へと避難した。

何処にでもいる死亡フラグを連発する奴（後書き）

何故か突然死亡フラグを書きたい衝動にかられた……

まあその結果文章が雑になったわけですけど。

時間があるときに修正しますので、読みにくかったという方はその時にでもまた見てください。

それではノシ

何処にでもある妖怪の秘密（前書き）

此処で一句。

インヴィディア

巨大化変身

死亡フラグ

何処にもある妖怪の秘密

瓦礫が彼方此方に転がっている中、立っているのはシュウゼン。そして瓦礫に紛れてインヴィディアの肉片もそこら中に転がっている。

たった今、決着が付いた頃であり、シュウゼンは刀を納めた後、いつものお茶らけた表情に戻る。

「それにしても……あの九尾狐にあんな秘密があったとは……急いで皆さんにお伝えしなければ……」

一瞬、お茶らけた表情が引き締まり、次の言葉に繋ぐ。

「取り返しの付かない事になる……！！」

広間にはシュウゼン、ユカヤ、ウルフ、ウィリアを除く全員がその場で睨み合っている。

クミホ側の戦力は六人。

対してレイジ側はシュウゼン含め三人。

圧倒的にレイジ側の不利な戦いになる。

「あの侍……シュウゼンとか言ったか？負けちまったのか？」

「いや、あいつ程強い奴が負けるわけねえ。俺が保障する」

レイジとシュウゼンはつい先日出会ったばかりだが、互いの実力を良く分かっている。

何年もコンビを組んできた相棒の様に、互いを認め合っているのだ。これに関しては馬が合った、としか言いようが無い。

レイジとギリユウは互いに頷き合い、一度距離を取る。

そしてレイジは雷刃、ギリユウは魔法弾を悪魔達に向け放った。

「喰らわねえよ……獄式・炎上壁！！」

悪魔の化身イーラが地獄の炎を自分達の盾にする。

そして女嫌の化身アケディアが大剣を背中から抜き、レイジに斬りかかる。

其処をギリユウが魔法弾を放って阻止する。

「テメエの相手は俺がする。ちと、話したい事もあるしな」

そしてその近くでは、レイジとイーラが相對する。

「おい、奥の奴等は掛かってこなくて良いのか？」

それはレイジとしては有難い事だが、何か企んでいるのではないかと言ふ疑心暗鬼に駆られてしまう。

それを右半分が白、左半分が黒い色のローブを着た長い金髪的青年が氣障に笑いながら言葉を發する。

「いやいや、君達はたった二人じゃないか？僕達は優しいんだ。だからその二人を倒したら、もう二人もも動くつてさ？あ、因みに僕は強いからその後一人君達の相手をするから、ね？」

馬鹿にする様に笑うローブの男は瞳だけは笑っておらず、もしイーラとアケーディアと後の二人が負けても自分だけでどうにかなると言う自信に満ち溢れていた。

レイジに獄炎を放っているイーラが、口角を吊り上げながらレイジに言葉を放つ。

「大将を取りたきや俺達を先に倒せ……まあ無理だろうが、てめえもあの犬ところ見てえに黒焦げにしてやんよ！！」

続いて、アケーディアも溜め息を付きながらギリユウの魔法弾を弾き、段々と距離を詰めていく。

「……めんどくせえ」

一言だけ、呟いたアケーディアは大剣に力を込める。

すると大剣の形状は斧の様になり、大きくジャンプした後、上空からギリユウを潰そうとする。

ギリユウは巨大な魔法弾でそれを弾いた後、再び距離を取った。

シュウゼンは広間に向かう為に、廊下を走っているのだが、その途中で瓦礫の山が道を塞いでおり、遠回りをしなければ成らなくなる。

「早く……早く伝えなければいけません……クミホの体はこの国の王女の姫さんの物だつて事を！！」

それはインヴィディアが死の間際に言った言葉にあった。

『妬ましい……クミホ様の憑依能力が妬ましい!!』

インヴィディアの台詞に疑問を持ち、シュウゼンがそれを駄目元で聞こうとする。

幸運にも、インヴィディアは自棄になってシュウゼンにそれを喋る。

『クミホ様は……若く、美しい娘に乗り移ってその若さと美貌を吸収しているんだ……クミホ様が体を入れ替える度に……あの方は美しくなる……それが妬ましい!!』

シュウゼンは数秒間、沈黙した後インヴィディアに止めを刺し、広間へと向かった。

「九尾狐を殺せば……あつしらは罪の無い人間の命を背負う事になる……!!それこそ悪魔達と同類に……!!」

シュウゼンはただ一人真実を知り、広間に向け走って言った。

何処にでもある妖怪の秘密（後書き）

まあ悪い奴をただ倒せば良い、って訳じゃ無いって事です
ね。悪い奴だって普通に倒しちゃう駄目な場合だってあります。
だから何だという話ですが。

何処にでもある悪魔の憑依（前書き）

何か今回指が勝手に動いちゃいました、文章が、文章が……どうしてこうなった？

何処にもある悪魔の憑依

レイジの電撃とイーラの獄炎がぶつかり合い、大きな爆発を起こす。互いに一歩下がりが、次の瞬間、昔の漫画やアニメの決闘シーンの様に、互いに攻撃を加えた後ですれ違う。

それこそ漫画やアニメなら此处でどちらかが倒れ勝負が付く筈だが、これは漫画ではなく、アニメでもなく、現実の戦い。

向き直り、再び攻撃を放つ。

爪と長刀のつばぜり合い。

これが人間同士なら、刀が爪を切り裂き、指を切断するにまで至るだろう。

だが片方は悪魔だ。

当然、体のパーツは人間よりも遥かに優れている。

身体能力も、其処らの戦士には負けたりはしない。

あくまで其処らの戦士には、だが。

長刀から電撃を流し、イーラにダメージを与える。

「あの犬ところよりはマシじゃねえか……俺のサンドバッグには、だがな!!」

一瞬、一瞬だが、レイジの放った雷刃がぶれる。

今までぶつかり合っていた雷刃と獄炎の勝負は雷刃が勝る。

とはいっても、それは一回だけで、次に放った雷刃は逆に獄炎に打ち消される。

それを不思議に思ったイーラだが、今はそれを確かめる術が思いつかないので、それは後回しにする。

「確か、お前がウルフとやったんだよね？」

レイジが、静かに、尚且つ良く聞こえるように言葉を発する。

イーラは突然何を言うかと思ったが、直ぐに口角を吊り上げ、狂ったように笑い出す。

「そうだ、あの腰抜けの犬は俺と戦って……俺に倒された、ククク、

テメエにも見せてやりたかったぜ？あの黒い毛皮の犬がもつと黒くなる所をな……」

イーラの言葉に苛立ちを覚えたレイジは電撃に紛れて相手の後ろに回る。

しかし、逆にイーラの攻撃を喰らってしまふ。

【バチバチッ！！】

否、攻撃を喰らったレイジは本物ではなく、電気で作った分身だった。

「じゃあお前も黒くしてやるよ」

レイジの電気を纏った攻撃をイーラはまともに喰らう。

後ろに吹っ飛ぶイーラを追いかけ、首元に長刀を突きつける。

「ウルフだつて戦士だ。やられる覚悟は出来てただろうよ……」

突然、語りだすレイジを見て、イーラは疑問符を浮かべる。

レイジはだが、と言葉を付け加えて話を続ける。

「でもな、俺がそれを納得するかどうかは別だ！！」

涙を流すレイジを見て、イーラはある事に気付き、つい噴き出してしまふ。

……こいつ、俺があの犬ころを殺したと思ってるのか、間抜けめ。勘違いをしているレイジをイーラは心の中で笑う。

その様に笑うイーラを見て、レイジは長刀が纏う電圧を強める。

「そつだよ、あの犬は俺が殺した……丸焼きにしても喰えそうなかったけどな」

クク、と笑うイーラに突きつけた長刀を喉元に突きたて、電流を流す。

瞬間、イーラが何かを呟いた気がしたが、今のレイジにはそんな事はどうでも良かった。

「ガアアアアア！！！」

表情を苦痛に歪め、痛みを吐き出すために声を上げる。

傍から見れば今の光景はレイジが悪で、イーラが被害者に見えるだろう。

「……苛立つか？ムカツクか？そりやそうだよな、仲間を殺されたんだからよ……俺を殺せば良い、それで、お前の憤怒を完全な物にしる……」

イーラが呟いた瞬間、レイジの頭の中に何かが流れ込んでくる。

憎しみ。

憤り。

殺意。

憤怒に繋がる感情の全てがレイジに流れ込んできた。

「おめでとう……テメエが二代目の憤怒だ、^{イーラ}糞野郎！！」

“今”のイーラが“次”のイーラの器、レイジに魂を移動する。

レイジは頭を掻き乱しながら苦しみ、銀色の髪がザワザワと逆立っていく。

そして、次の瞬間に当たりに激しい風が起きる。

それは近くで戦っていたギリユウとアケーディアを吹き飛ばす程にレイジ、否、イーラの元へクミホが歩み寄る。

「どうじゃ……新しく生まれ変わった感想は？いつてみい“イーラ”？」

イーラが口角を吊り上げると共に、クミホも笑う。

「死ねよ、狐婆……」

二代目のイーラはクミホの腹を強く蹴り飛ばし、表情を怒りに染める。

「こんぐらいで俺を支配できると思うなよ？俺を支配しているのは、テメエじゃねえ……純粋な怒り……俺はイーラじゃねえ！！怒りに支配はされているが、おれはレイジ！レイジ・ライトウネイルだ！
！ヒヤハハハ……」

いつものレイジならば上げないような笑い声を、声高らかに上げる。その笑い声は悪魔の化身の物だが、レイジは完全には人格を失っていない。

「先ずはウルフを殺したテメエ等を……そして次は人間共を殺す！！」

レイジの心に違和感が襲った。

「人間？何故俺が人間を……殺すのは狐とその取り巻きでいい筈…

…」

頭を抱え、苦しみだすイーラ、もといレイジにアケーディアが斬りかかる。

「お前はイーラじゃねえなら……俺の敵だ!!」

アケーディアの大剣が、レイジの肩を一閃しようと食い込んだその時。

次の瞬間にはレイジの手がアケーディアの腹を貫いていた。

何処にでもある暴走する奴

腹を貫かれ、即死したアケーディアを尻目に、イーラに取り付かれたレイジが頭を抱えながら震えている。

それを見たギリユウが煙草を一服し、煙を吐き出す。

そしてこりや拙いな……一言喋ると、レイジに駆け寄る。

「おい、大丈夫か……？」

無論、大丈夫じゃない事は分かっている。

だが、その時はまだ、希望を持っていた。

先ほどの台詞から、まだレイジは憤怒に支配はされていない。

そう思っていた、否、そう思っていたかった。

「ああ、大丈夫だ……なんだか、清々しい気分だ」

振り返ったレイジの顔は狂気に染まっていた。

そして長刀をギリユウに向け、黒く染まった目で睨み付ける。

「全部……全ブ消えてくれレバ、モットいい気分に、きぶん……」

キブンニ……ガアアアア！！」

黒く染まった両目からは二筋の鮮血が伝い、口からは牙が生える。

ギリユウを吹っ飛ばしたかと思うと、宙に浮いた後にクミホを狙う。

その瞳には、レイジの面影は無く、全てを壊す、破壊神の目となっている。

「ち……イーラの奴、暴走しておるか……」

クミホは舌打ちをした後で掌から金色の太刀を出し、それを握る。

「我が下僕である事を忘れ、その上、主人に牙を向くとは……仕置

きが必要じゃな……！」

クミホの後ろには、ローブの男が続き、さらにピエロの格好をした

青年と仮面を被った青年も続く。

「僕は天界から来た傲慢を司りし墮天使の化身、名前はスペリディ

ルシファー

ア……血に狂った反逆の徒に罰を与えに来た！目を覚ませ、イーラ

……！！」

「僕は物語の世界からきた虚飾を司りし道化の化身、名前をイナニス！刑はルシファーに同じ、覚悟しろ！」

「私は館から来た憂鬱を司りし伯爵の化身、名前をラックス！刑はルシファーに同じ、覚悟したまえ」

三人の悪魔は同時に、レイジに向けて魔力で形作ったレーザーの様な物を撃ち出す。

それをレイジは軽々と避け、一人一人に手刀を喰らわせる。

三人の元に雷を落とし、麻痺させた後でクミホを狙う。

「我だけが狙いか……」

クミホが太刀を振るうがレイジにそれは中らず、鋭く尖った爪で、クミホの左胸を貫こうとする。

が、それは寸前である者に制止される。

「そんな姿になって、一体どうしたっていうんですかい？」

シュウゼンがレイジを止めたのだ。

「そんなにウルフ君がやられてショックですかい？別に死んでませんけど……」

刀を押し切ろうとした爪の動きが止まり、「ガ……」と唸り声を上げる。

「だーから、ウルフ君は死んでません……よー!!」

言葉に力を入れ、レイジの額に紙切れを張る。

「忍々！」

シュウゼンが印を組み、忍術を唱えるとレイジの体から黒い粉が舞い、今度はそれをビンの中に封じ込める。

先ほどの乱心が嘘のようにレイジがその場に倒れるのを見届け、シュウゼンはクミホ達を見る。

「さて、まだやりますか？今は互いに剣を収めるのが得策だとは思いますが……今の奴さん達なら、あつし一人で十分倒せますよん？ただ仲間の手当てが遅れるだけで」

その様に笑うシュウゼンを暫らく睨んだ後、フ、と軽く笑う。

「お言葉に甘えさせてもらおうとしよう。全く、食えぬ男よ」

シュウゼンが返事をしようと振り返った時にはクミ水達の姿は無く、シュウゼンとギリユウはレイジとウルフ、ウイリア、ユカヤをその場に寝かせ、怪我の手当てをした。

その場にいたギリユウは何が起こったのか分からずにいた。

否、何が起こったのかは分かる。

唯、展開が急すぎて頭が追いつかなかった。

何処にでもある暴走する奴（後書き）

嗚呼、どうしてこうなった。

いや、本当に。

展開が急過ぎる……！！読者様の反応が心配です……

何処にでもいる我儘姫

レイジ達がいるティアタウンの東、ノヴァ大城は異様な光景が広がっている。

兵士達は全て魔物、とは言っても、少し一般人より強いだけの、魔物としては雑魚の部類に入る。

その中に極稀に、中級戦士相当の魔物がいるのみ。

因みに魔物の姿はリザートマンや、ゴブリンなどの人形の魔物である。

城の王の間のさらに奥、寝室には尻尾を隠して寝っ転がっているクミホと、その傍には堕天使の化身、スぺリディアの姿がある。

「スぺリディア……」

クミホの呼びかけにスぺリディアが顔をクミホの元へと向け、返事をする。

「ハイ？なんでしょうか、クミホ様」

笑顔で返事をするスぺリディアに抱きつき、背中に腕を回すクミホは不機嫌そうな顔で口を開く。

「暇……」

スぺリディアはクミホの頭を撫でたあとで、その体を離し、ティーカップに紅茶を淹れる。

それをクミホと自分の所に入れた後でベッドの横にある椅子に座る。

「私は玉露の方が好きなんだけどな」

他の誰にも見せない表情と、誰にも使わない口調でスぺリディアの淹れた茶に文句を言いながらもそれを美味そうに飲む。

これだけ見たなら、我儘なお嬢様とそれに手を焼く執事という風に見えるだろう。

「……人間、滅ぼして良い？」

クミホがスぺリディアの顔を覗き込むように見て、物騒な、冗談とも取れない事を言う。

「人間は、確かに生かす価値のない生き物ですけど……ですがあなたの生命を保っているのも、その人間なんですよ？」

「確かに、この体の主は他の人間とは違う。何せ死に際に私を受け入れてくれたのだから……ね？」

城の一室、魔力を注ぐ為の水晶に道化のイナニスと伯爵のラックスが自身の魔力を注いでいる。

その水晶はこの城を浮遊させる為の物であり、人間達の侵略を防ぐ為に浮遊させるのだ。

クミホ達の力なら侵略してくる人間たちを———と思うかもしれないが、今、彼女らは四人しかメンバーが揃っていない。

残りの六人を人間達が殺したのだから、人間達を甘く見るわけにはいかない。

「うー、もう疲れたー！ラックス、後は一人で頑張つてよ」

その場を去ろうとするイナニスの後ろ首を掴み、影を帯びた笑顔でイナニスを見る。

「仕事を放棄しようといいのですか、ならばスペリディア様にご報告しますよ」

ラックスがそう言った瞬間、イナニスの表情は青ざめ、慌てて仕事に戻る。

スペリディアはこの団体の中で副リーダーに当たる。

「ぶっちゃけていうとクミホ様よりスペリディア様の方が怖いもんね……」

イナニスの言葉にラックスがうむ、と頷くと、水晶に魔力を注ぐという仕事を続行するのだった。

「ねえ、暇」

クミホのこの台詞はこれで何回目だろうか。

スペリディアがこの部屋を訪れる度にこう話しかけている。

「フフフ……」

スペリディアが突然笑い出し、クミホは思わず引いてしまう。

「いえ、クミホ様が可愛いなあと思ひましてね」

その発言にクミホはさらに引いてしまいが、スペリディアはその訳を説明する。

「今のクミホ様は人間から恐れられる九尾の狐にはとても見えません。それこそ唯の可愛いお嬢様に……」

バフ、とクミホの投げた枕がスペリディアの顔面に直撃する。

尤も、枕に詰めてあるのは100%の羽毛の為、痛くも痒くもない。

「それはそうだよ……この体は世間知らずのお姫様の物なんだし」

「でも口調や性格は変わらないでしょう？」

クミホはスペリディアの言葉に顔を赤くしながらうつ、と俯く。

そんな中、スペリディアは微笑んで、クミホの投げた枕を定位置に戻す。

「今の姿をあの人間達が見たら、どんな反応をするでしょうか？」

スペリディアは意地悪な笑顔をクミホに向け、クミホの答えを待つ。あの人間達、というのは間違いなくレイジ達の事だろう。

レイジ達の前では貫禄のある口調で喋り、振る舞いも悪の組織の長らしく動いた。

「問題は無いよ、だって女は化ける、って言うでしょ？それに昔から狐は化かす生き物なんだしね」

そう笑うクミホを見て、スペリディアは紅茶をカップに入れた後で、その部屋を出て行った。

その時にクミホが不満そうな表情を浮かべたのはまた別の話だ。

「クミホ様の日常は“私”が護らねば……」

廊下を歩くスペリディアの言葉に、ゴブリンの兵士が首を傾げたが、その後で直ぐに仕事に戻っていった。

何処にでもいる我儘姫（後書き）

クミホ達は唯の悪ものじゃない、という話です。

そしてスペリディアが他の悪魔達と少し違います、という話でもあります。

さらにクミホはスペリディアの前では唯の我が儘お嬢様。

他では悪の組織のリーダー、というギャップの話でもあります。

シュウゼンが掴んだ秘密をチヨロチヨロと書きましたが、ちゃんと伝わっていますか？それが心配なんです。

それでは次回でお会いしましょう。

何処にでもいる妖怪婆（前書き）

覚えているでしょうか、あの人の存在を……

何処にでもいる妖怪婆

ノヴァ大城の近くにある丘の上、双眼鏡越しでレイジとシュウゼン、ギリユウが大城を見る。

ノヴァ大城は空に浮かんでおり、さらには禍々しい雰囲気も放っている。

一瞬、双眼鏡の中に映る景色が歪み、大城はそこから姿を消してしまふ。

レイジは双眼鏡を仕舞い、ギリユウに向けて肩を竦める。

それは怪訝そうな表情をしたギリユウの表情を沈め、シュウゼンはハア、とため息をつく。

「戻りましょうか。ウィリアさんはウルフ君の看病をしている筈ですよ」

シュウゼンの一言で、レイジ達はティアタウンへと戻っていった。

街の住民は全員遠くの街へ避難し、ゴーストタウン宛らとなったティアタウン。

其処の一際大きな建物、街一番の宿屋をレイジ達は勝手に使用しながら身を休めていた。

ウルフはまだ目を覚まさず、ユカヤの足は今現在使い物にならなくなっている。

「おう、ウィリア。帰ったぞ」

「え、あ、お、お帰りなさい!!」

妙に顔を赤くしながらレイジを迎える。

ウィリアの頭の中は仕事から帰ってきた夫とそれを迎える妻という妄想が広がっていたが、それは完全なる余談なので捨て置く。

「さて、あの城の中の大將をどうにかしなけりゃいけないのもそうだが、狼坊主ウルフとユカヤの怪我をどうにかしなけりゃいけないな……」
ギリユウ言葉にレイジは頷きそれなら、とある知り合いの話をする。

「俺のしつてる妖怪婆なら、そこらの名医よりずっと良い治療をしてくれるぜ」

そう、レイジはガイストならばウルフとユカヤの怪我をどうにかしてくれると踏んだのだ。

「妖怪婆……まさか危ない薬でも飲まされるんじゃないだろうな？」

ユカヤは妖怪婆という単語だけを聞き、少々引く。

「安心しろ、見た目はオニババか悪い魔女だが、種族的にはギリギリ人間だ」

レイジの散々な言い草を聞いて治療を受けたことのあるウィリアは顔を引き攣らせながら苦笑する。

三日程ノヴァ大城の様子を見て、何もない事を見計らってレイジ達はガイストの家まで直行した。

距離は結構あるのだが、馬車を使えば直ぐである。

馬車が家の前に到着し、代金を受け取るとさっさとその場から離れてしまう。

「前もこんな事あったな……」

若干、デジャヴを感じながら家のドアをノックする。

そして以前と同じように家の中から騒音を立てて音が段々と近づいてくる。

「ヒィーヒッヒッヒ！！よく来たね！おんやぁ？坊やじゃないかい！！今度はなんのようだい！？」

矢鱈テンションが高いガイストをレイジは軽くスルーし、ウルフとユカヤの治療を頼む。

ガイストはレイジ等を家の中に招き、ウルフとユカヤをベッドに寝かせる。

因みに、ユカヤの目には若干涙が溜まっている。

「こ、怖くなどない……私は誇り高き戦士だ……」

治療と戦士がどう関係あるのかは不明だが、ユカヤの精神状態が普通ではない事は確かである。

「先ずは小僧の方だよ!!」

何か怪しい野菜や木の実などをすり潰し、それを薬の中に混ぜる。それをミックスジュースのようにシェイクすると、それは赤い色になる。

傍から見ればそれは悪い魔法使いが怪しい薬を作っている様にしか見えないだろう。

「さあ飲みな!!」

「む、無茶をするな!!」

隣のベッドでユカヤがそういったのも無理はないだろう。

何故なら瓶の中身の薬をウルフの顔にぶちまけたのだから。

十秒、ウルフが呻き始める。

二十秒、ウルフの顔が赤く染まる。

三十秒、ウルフが火を吐きながら飛び上がる。

つまりガイストの薬でウルフは目を覚ましたのである。

因みに、先ほどの薬の材料は唐辛子、銀杏、山葵^{わさび}等の辛い、もしくは苦い味のする木の実や野菜。

それ以外にも明らかに体に悪そうな生き物まで入っていた。

「目を覚ましたかい？ 犬っころ!？」

ウルフの額に自身の額を近づけ、熱を図る。

その間にウルフは再び失神しそうになったのだが、なんとか意識を保った。

「さゝて次は小娘!! あんただよ!!」

そのあと二十分程、ユカヤの絶叫が当たりに響き渡ったのだが、レイジは他人事の様に茶を飲んでいた。

「今日も平和だな……」

それは現実逃避に見えるのは気のせいである。

何処にでもいる妖怪婆（後書き）

という訳でガイスト再登場です。

ガイストはヤブ医者ではありません。
寧ろ超名医です。

唯治療法が無茶しまくりなだけです。

それはそうと、評価、感想等々、いつでもお待ちしていますんでお気軽にどうぞ。

誤字脱字、おかしい所、ストーリーの駄目出し、なんでもいいです。
どうぞよろしくお願いします。

何処にでもいる妖怪婆と竜人

クミホ達との戦いで傷を癒す為に二週間程ガイストの家で休んでいた。

勿論ノヴァ大城の様子が気にならなかった訳では無い。

だがガイスト曰く、知り合いが様子を見に行っているから大丈夫、との事だ。

今日の午後、その知り合いが自分の所まで報告しに来るとの事でそれまで待て、というガイストの言葉だが、レイジ曰くこの妖怪婆に知り合いがいる事自体が珍しい、との事。

「ああ！？失礼だね！妖怪婆だってワシは社交的な“ぷりていうーまん”だよ！！」

「妖怪婆は否定しないんだね……」

ウィリアがそういうとガイストは何時ものように魔女のような笑い声を上げ、レイジに拳骨を食らわす。

そして全員に茶を出した後で、先ほど言っていた知り合いの到着を待つ。

因みに、レイジの茶だけ紫色をしていたのは完全なる余談である。

午後二時頃、外から足音が聞こえ、ドアがノックされる。

「あいあい！！いま開けるからお待ちよ！！」

キッチンからダッシュでドアへと向かう。

その間にあらゆる物を蹴散らして言ったのにはレイジ達は苦笑する。ガチャ、と音を立ててドアが開く。

ドアの向こうにいたのは大柄の、鎧を装備した褐色の肌をした男。見た目からして竜型の亜人である。

「良くきたね！！アース！！」

アースと呼ばれた竜人がうむ、と返事をし、レイジ達の目をやる。

「ほう……レイジ君にウルフ君、ウィリアちゃんもいたか」

アースは三人の名前を言うと、部屋の中のソファーに腰を下ろす。

「あんた……地竜か？」

「如何にも、私は神器を守っていた地龍、名前はアース・グランバルディという者だ。」

まあこの名前はつい最近人間界で暮らすために付けたのだがね」

アースの言葉を聞いて、一つ、レイジは怪訝に思う所があった。

それは“人間界で暮らす”という言葉についてだ。

「地竜、いやアース……お前、神器を守ってるんじゃないのか？」

アースはそれを聞いて首をフルフルと横に振る。

それは神器を奪われた、或いは認めた者に渡したという事だろう。後者ならまだいい、自分達が負けたというだけだ。

しかし前者ならば、それはクミホ達の可能性が高い。

何故なら神器の守護者が認めずに手に入れたということは神器の周りに張ってある結界を破壊したという事だ。

そしてクミホの手下の内の一体、インヴディアは神器以外の宝玉、その内の一つである紅の宝玉も奪っていった。

そしてこの後、アースはその赤の宝玉についての話をする。

「ウルフ君の守っていた赤の宝玉は言わば“裏”の神器だ。紅の宝玉、蒼の宝玉、金の宝玉、銀の宝玉。それぞれ神器と対になっている、そして宝玉は鳳玉と言い換え、伝説の魔獣を復活させるための代物だ」

アースに続き、次はガイストが話をする。

「対して“表”の神器は何か願いを叶えるだけで無く、その魔獣を操る為の物さね、さてさて、どうなる事やらねえヒツヒツ」

ガイストとアースの説明により、クミホの目的が分かり始めた頃、再びアースが口を開く。

「私の見立てによると次にクミホ達が動き出すのは八ヶ月後……その間に何をするかは君達次第。さて、どうする？」

アースの試すような口ぶりにレイジは挑戦的な笑みを浮かべる。

その何処か楽しむような表情に、アースも口元を綻ばせる。

「戦力を集めよう。勿論アース！オメエにも協力してもらっぜ？文句はねえな？」

「文句がある、と言っただけなら？」

「力づく、だ！」

【ゴン！ゴン！】

レイジとアース、互いの頭にガイストの拳骨が飛ぶ。

「静かにせんかい！！ここあ狭いんだよバカタレ共！！」

その日、二人は目覚めぬまま、とはいってもガイストの拳骨によるものだが、次の朝を迎えた。

ガイストの家から数十分歩いた所でアースとレイジが向い合う。

「これで俺が勝ったらアース、テメエは俺の下僕だ」

「いいだろうそれなら私が勝ったならばフッフ、それは私が勝つてからのお楽しみというのか」

不敵な笑みを浮かべるアースに若干寒気を感じながらもレイジは長刀を構える。

ガイストが空にコインを投げる。

コインが地面に落ちた音を合図に、二人の決闘が始まった。

何処にでもいる妖怪婆と竜人（後書き）

何故ガイストが神器の使い道を詳しく知っていたか、神器の事はこの世界の常識、という訳ではありません。ただ神器は願い事を叶える為だけにある、と認識している人が殆どです。

何故ガイストが真の力を知っているかは……いつか、何時の日かお話します。

ソレデハ（ゝ・ω・ゝ）ノ サヨウナラ

何処にでもあるへーんしん！！（前書き）

今回遂にレイジの秘密にしていた技が披露されます。

レイジとウルフ、ウィリアが三人でいる時に、地竜と戦った時に、ウィリアとウルフが気絶したときに使ったアレです。今回その全貌が遂に明らかに！！

……… suite、少し調子に乘りました………
では氣を取り直して、今回の話をご覧ください。

何処にでもあるへーんしん！！

アースの実力は以前と変わらず、そこらの冒険者より、数段強いであろう実力を保っていた。

ブレスや岩石攻撃等の攻撃も然る事ながら、突きや蹴り等の打撃も一流と言われても可笑しくない程の威力だ。

然もそれは型がキチンとなっており、アース曰く二百年程前に主の仲間に教わった、との事だ。

ちりゅうしょうけん
「地竜衝拳！！」

山吹色のオーラを纏った拳はレイジの右頬を掠め、ジワジワと傷から血液が滲む。

レイジは刀から電撃を放ち、アースの顔面を狙う。

しかしアースはそれを少ない動作で回避し、レイジに向け回し蹴りを放つ。

レイジは体中に雷属性の魔力を鎧のように纏い、アースの足に僅かながらもダメージを与える。

そんな攻防戦を繰り返す中、アースがそつとレイジに向け、口を開く。

「あの技は使わないのかい？」

アースの言うあの技、とはレイジが人間、少なくとも仲間に見られたくない、以前、ウルフとウィリアが気絶した時、アースに向け放った技。

「中々強かったよ、あれは。私も二カ月ほど痛みが引かなかった」
アースの言葉にレイジは何を思ったか、急に接近して、アースの両肩から斜めに二閃する。

だが、アースはそれを砂の鎧を纏う事で防ぎ、結果的にはアースは無傷となる。

「こんな攻撃で私は倒せない、私を下僕にするのでは無かったのかい？」

アースの挑発に乗ってか乗らずか、レイジは無言でアースに攻撃するが、それは全てs名の鎧で無効化される。

「君は恐れているんだ。“あの姿”を見られて仲間が離れて行くんじゃないか、とね。仲間を信じなさい。君の仲間はそんな者達じゃ無い筈だろう？」

アースの言葉にレイジは一瞬俯き、次に顔を上げた時は瞳に炎が宿る。

勿論それは比喻であり、レイジの決心を現わした例えである。

次の瞬間、レイジは自身の長刀を自身の腹に突きさす。

その光景に仲間達は怪訝そうな表情をすると共に顔を顰める。

一体、何をするのかと、そう思った次の瞬間、レイジの姿が一変する。

レイジは蒼い稲妻を纏い、頭には鳥の顔を象った仮面、背には翼。

レイジの持つ刀の名前は雷刀・魔鳥驚らいとう まちようじゅう。

古来に幾多の町を襲ったと言われるサンダーバードという怪物を封印した刀。

それを魔力の核を司る体内の袋に突きさす事で前述のサンダーバードの力を得ると言う。

『手加減は出来ねえと思う……死ぬなよアース』

地に響く様なその声にアースは口角を吊り上げ、雷鳥と化したレイジに戦いを挑む。

地竜と雷鳥の戦いは辺りの木々や草花を焼き焦がし、辺り一面焼け野原となっていた。

尤も、それはレイジが雷鳥の力を上手く使いこなせずに、無駄に電撃を放出したのが大きいのだが。

雷鳥と化したレイジの攻撃方法は極めて単純。

空中で翼を動かし、そこから大量の電撃を放出、そのあとで段々と近付いて行き、鋭い仮面の嘴を突き指す、という一見穴だらけの戦法に見えるが、雷鳥になったレイジの動きは素早く、隙を見せても

次の瞬間には、1 mほど遠くに居るのだからその速さは殆ど反則である。

その速さの源は電気で出来た翼である。

翼の役割は飛ぶ事、それは当たり前である。

だが、その翼を構築する電気のせいで雷の如く、光の速さで動く事ができるのである。

『そろそろ終わりにするからな……いつまでもこの姿で居たくないんでね』

パカ、と効果音が付きそうな具合に仮面の口が開き、中からレイジ本体の顔が覗かせる。

『電極・雷鳥乱舞』

纏う電気の電圧を十倍まで上げ、まるでミサイルの様にアースに突撃する。

しかしそれはギリギリ反応出来る速さで、アースは土の壁を眼前に展開する。

しかし、レイジの被る仮面の嘴はアースの背中へと突き刺さり、着用している鎧に罅が入る。

そしてそれは四方八方から舞うように攻撃し、アースに片膝を付かせる。

アースは片腕を頭上に上げ、ひらひらと振る。

「こ、降参だ。負けを認めるよ……」

レイジの動きがピタ、と止まり、雷鳥の衣も剥がれて行く。

元の姿となったレイジも片膝を付き、ニヤ、口角を吊り上げる。

「お、俺の勝ちだな」

レイジはそのまま気絶し、その後ガイストの手厚い治療を受けることになった。

何処にでもあるヘーんしん!!（後書き）

刀の名前はぶっちゃけたった今決めました。
ただ、刀にサンダーバードが封印してある、
解放の仕方は
前々からやろうと思ってました。

何処にでもいる英雄

現在、レイジ達はガイストの家の中で出された昼食を頬張りながら、これからの方針について話す。

アースが仲間に加わった事で戦力は大幅に上がった物の、敵と比べるとまだ戦力は心許ない。

何故ならクミホは前回より性能の高い悪魔を作り出そうとしていると予想されるからだ。

その理由はアースが神器を盗まれたことに関係し、神器の伝説の魔獣を操る本来の能力とは別の能力、世間に知れ渡っている“願いを叶える”能力を使い、悪魔を強化されていると思われる。

さらに以前祈りの遺跡でインヴィディアに奪われた紅の宝玉の力も相まって、それは凄まじい物である事が伺える。

因みに、レイジのサンダーバードの力の事は、ウィリアを始め、全員気にしていない様子だった。

強いて言えばウルフが「カツコイイ！」と眼を輝かせていたことか。

つまり何も問題は無く、レイジの心配は正に的外れな物となっていた。

つまりレイジのお頭はあまり〜という例のあれである。

「ねえねえ、結局、この後どうするの？」

ウィリアが机に頬杖を付きながら言う。ガイストが全員分の茶を持ってきて、レイジ達に助言をする。

「そうだねえ……此処からずーっと南に行った所にワシの知り合いが住んでるんだが……ものすごい変人だから言っても無駄かもしれないねえヒツヒツヒ」

それをあんたが言うかとレイジはガイストを見たが、ガイストはそれに気づかず、魔女のような笑い声を上げる。

「それにしてもお婆さん……知り合いって一体誰？」

ウルフが率直に疑問を述べるとガイストはにやりと笑い、不気味な顔をさらに歪める。

「二百年前に神器を全て集めた英雄ソルトールの仲間の六人の内の一人……吸血鬼ブロッケン・ブラッドだよ」

ガイストの言葉に全員、騒めくと共に驚愕する。

二百年も昔の英雄の一人が生きているのは吸血鬼だから、という理由で納得できる。

だが、腑に落ちないのはそんな有名人とガイストが何故知り合いなのか、という事だ。

「そりゃあ……ワシもその英雄の内の一人だからじゃろ？ ヒツヒツヒ」

『ええええええええ！？』

アースを除く、この場にいる全員がその事実には驚き、叫び声に近い声を上げる。

ガイスト事、ガイミニア・ストークス。

それがガイストの本来の名前だった。

南の町、リーアには有名な世界スターや芸能人が数多く済んでいる。その住民の多くは美意識が高く、詰まる所ナルシストが多い街である。

ガイストの言う、ブロッケンが変人、というのはブロッケン自身もナルシストという事だろうか。

レイジ達はそこへ向かう為、馬車を捕まえようとするが、ガイストの家に二回も邪魔したという噂から逃げられていた。

そんな中、アースが竜型に変身し、ガイストに教えられた場所まで飛んでいくことになった。

何処にでもいる英雄（後書き）

何かどうかで見たような話に… 宝玉といいそれを使つてのパワーアップといい、レイジの変身といい… パクつてゐるわけではありませんので悪しからず。

そもそも何に似ているかが分かなければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5569x/>

普通冒険記

2011年12月3日12時46分発行